

第二期武蔵野市スポーツ推進計画（仮称）

令和4年度～令和13年度

中間のまとめ

中間のまとめについて皆様のご意見をお寄せください。

◆募集期間

令和3年11月5日（金曜日）～11月25日（木曜日）まで（必着）

◆提出方法

氏名、住所、電話番号等連絡先をご記入のうえ、郵送、ファクシミリ、
電子メール、または直接生涯学習スポーツ課へご提出ください。

◆提出先（問い合わせ）

住 所：〒180-8777 武蔵野市緑町2-2-28

電 話：0422-60-1903 FAX：0422-51-9264

メール：SEC-SYUUGAKU@city.musashino.lg.jp

武蔵野市教育委員会生涯学習スポーツ課（スポーツ振興係）

※ご提出いただいたご意見の内容は、個人情報を除き原則公開いたします。

武蔵野市教育委員会

目 次

第1章 計画の考え方.....	1
1. 計画の趣旨.....	3
2. 計画の位置付け.....	4
3. 本計画におけるスポーツの考え方.....	5
4. 計画の期間.....	7
第2章 武蔵野市のスポーツを取り巻く現状と課題.....	9
1. スポーツを取り巻く社会情勢と政策動向の変化.....	11
2. これまでの取組の実績と評価.....	14
3. 市民等のスポーツに関する意識・行動.....	18
4. 市のスポーツ環境.....	31
5. 課題のまとめ.....	34
第3章 基本理念・施策.....	39
1. 基本理念・基本方針.....	41
2. 施策体系.....	44
3. 重点施策.....	46
4. 具体的な施策.....	47
第4章 体育施設類型別施設整備計画.....	65
参考資料.....	67
1. 用語説明.....	69
2. 武蔵野市のスポーツ・運動に関するアンケート調査の概要.....	72
3. 第二期武蔵野市スポーツ推進計画策定の経過.....	74
4. 第二期武蔵野市スポーツ振興計画（仮称）策定委員会委員名簿.....	75

※参考資料で用語説明を掲載している用語には「*」の記号を付けています。

第 1 章 計画の考え方

1. 計画の趣旨

本市では、平成 21 年 4 月に、多様な市民がのびのびと自由に身体を動かし、様々なスポーツに取り組める場や機会を整えていくことで生涯スポーツ社会を目指し、本市のスポーツ施策を総合的に推進する指針として、「武蔵野市スポーツ振興計画（平成 21 年度～平成 30 年度）」を策定しました。

武蔵野市スポーツ振興計画は、2つの基本理念「人の視点」と「地域の視点」に基づき、4つの基本方針「きっかけづくりの充実」（広げる）、「継続するための取組」（つなぐ）、「既存資源の活用」（活かす）、「ライフスタイルの構築」（育む）と、そのための2つの実現化方策「情報提供の充実」（伝える）、「連携づくり」（支える）により構成され、スポーツ施策を推進してきました。

武蔵野市スポーツ振興計画の策定以降、国のスポーツ基本法*の制定（平成 23 年）及びスポーツ基本計画*（第一期）の策定（平成 24 年）、ラグビーワールドカップ 2019™及び東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会（以下「東京 2020 大会」）の開催決定など、スポーツに関する大きな状況の変化がありました。このような変化を受けて、平成 28 年 4 月に本市のスポーツ振興計画を一部改定し、計画期間を令和 3 年度までと設定しました。

一部改定をした武蔵野市スポーツ振興計画が計画期間終了を迎えるとともに、この間、ラグビーワールドカップ 2019™及び東京 2020 大会の開催や、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴う新たな生活様式の普及・定着など、スポーツを取り巻く環境は著しい変化がみられます。また、老朽化している市立スポーツ施設の整備についても検討が必要な時期を迎えています。

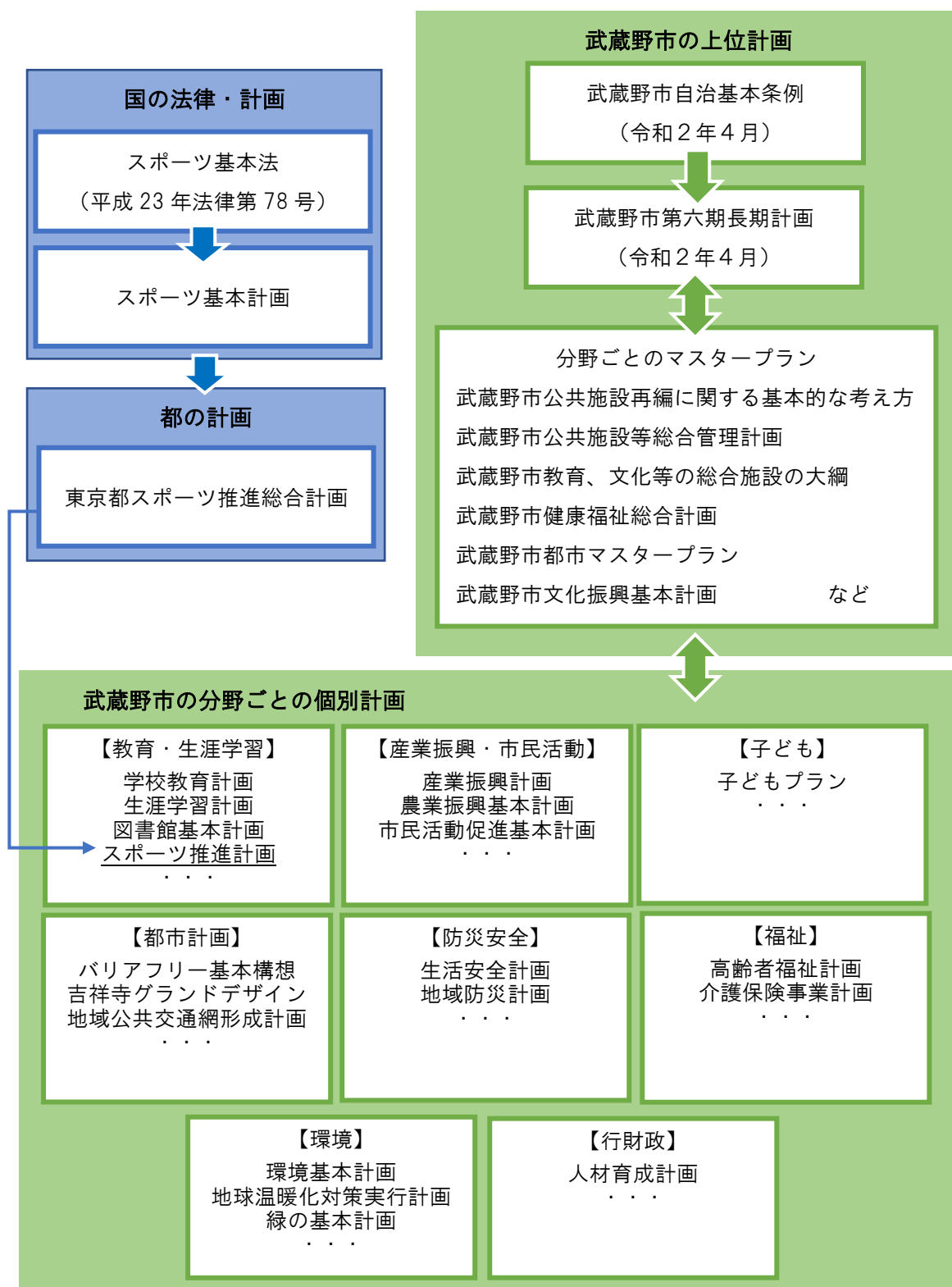
以上のことから、武蔵野市第六期長期計画に基づき、武蔵野市におけるスポーツに関する事業を体系化し、総合的に推進することを目的として、第二期武蔵野市スポーツ推進計画を策定することとしました。

なお、平成 23 年のスポーツ基本法の制定を受け、スポーツを「振興」することから「推進」していく方向性に変更され、本計画の名称も市民の自発的、主体的な活動に対して支援を行うという意味合いの「推進」計画とすることとしました。

2. 計画の位置付け

本計画は、スポーツ基本法第 10 条第 1 項に規定する「地方スポーツ推進計画」であり、本市がスポーツを推進する上で目指すべき施策の方向性や取組を体系的に示したものです。

上位計画である「武蔵野市第六期長期計画」及び分野ごとのマスタープランと整合を図りつつ、分野ごとの個別計画と連携を図る計画として位置付けます。さらに、国や東京都の計画の目指す方向性や内容の趣旨と整合を図るよう留意します。



3. 本計画におけるスポーツの考え方

(1) スポーツの価値や可能性

スポーツ基本法において、スポーツは、「世界共通の人類の文化」であるとともに、「心身の健全な発達、健康及び体力の保持増進、精神的な充足感の獲得、自律心その他の精神の涵養等のために個人又は集団で行われる運動競技その他の身体活動」であり、「次代を担う青少年の体力を向上させるとともに、他者を尊重しこれと協同する精神、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を培い、実践的な思考力や判断力を育む等人格の形成に大きな影響を及ぼすもの」とされています。

また、国が策定した「第2期スポーツ基本計画」では、社会の課題解決にスポーツを通じたアプローチが有効であることを踏まえ、スポーツを通じて「共生社会*の実現」「健康増進」「経済・地域の活性化」などに積極的に取り組むことを掲げています。東京都が策定した「東京都スポーツ推進総合計画」においても、スポーツを通じた「健康長寿*の達成」、「共生社会の実現」、「地域・経済の活性化」を大きな政策目標とし、スポーツ施策を推進しています。

一方、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を受けて、外出自粛による運動不足や人と人との接点の希薄化が進む中、スポーツは市民の心身の健康づくりや充足感の醸成、人と人との交流の促進、地域の一体感や活力の醸成に寄与する重要な活動であるということが再認識されています。

このように、スポーツは個人として楽しさや喜びを得られるだけでなく、地域の課題解決に資する役割も期待されています。

(2) スポーツの定義

スポーツ (sport) は、ラテン語の「deportare (デポルターレ)」に由来する単語とされています。「deportare」は、「ある物がある場所から他の場所に移す」という意味から派生し、「心の重い、嫌な、塞いだ状態をそうでない状態に移す」、すなわち「気晴らしをする」、「楽しむ」、「遊ぶ」などを意味していました。この言葉が、古フランス語の「desport」を経て、現在の「sport」に至ったとされています。また、競技や種目の集合体を表現する際に用いられることが一般的な「sports」と異なり、「sport」は人類共通の文化としてのスポーツを意味する言葉としてとらえられています。

本計画では、市民がスポーツ (sport) をより身近なものとして楽しみ、人類共通の文化として親しむことができるように、スポーツの語源や「スポーツ基本法」で示されている定義を踏まえ、スポーツの概念を幅広くとらえます。具体的には、勝敗や記録を競うものだけではなく、身体を動かす遊びやレクリエーション、ウォーキングや体操、トレーニングなどの健康づくり・介護予防のための運動、自然に親しむ野外活動、電子機器を利用してゲーム感覚で身体を動かす活動なども含め、自発的に楽しむ身体活動全てをスポーツとしてとらえます。

4. 計画の期間

本計画の計画期間は、令和4年度から令和13年度までの10年間とします。また、今後も予想される社会情勢やスポーツ政策動向の変化に的確に対応するため、必要に応じて見直しを行います。

年度	令3 2021	令4 2022	令5 2023	令6 2024	令7 2025	令8 2026	令9 2027	令10 2028	令11 2029	令12 2030	令13 2031	令14 2032	
長期計画 (総合計画)	第六期長期計画												
		実行計画		→	←		展望計画		→				
		策定	第六期長期計画・調整計画										
							策定	第七期長期計画					
	策定	第二期スポーツ推進計画（仮称）令和4～令和13年度											
											策定		

市民、専門家、関係団体等の参加のもとに策定した個別計画との整合性を重視し、総合的に策定する。

第2章 武蔵野市のスポーツを取り巻く現状と課題

1. スポーツを取り巻く社会情勢と政策動向の変化

スポーツを取り巻く社会情勢や政策動向は刻一刻と変化しています。市民が楽しんでスポーツに親しむことのできる施策を展開するため、特にスポーツに影響する社会情勢の変化と国や東京都の政策動向を整理します。

(1) 社会情勢の変化

①新型コロナウイルス感染症の影響

新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、運動不足による健康二次被害、スポーツに親しむ上での「新しい生活様式」への対応の必要性、スポーツ施設の利用制限、学校体育・運動部活動の活動制限、アマチュアのスポーツ大会・イベントの延期・中止などが生じています。国が示した「新たな生活様式」を留意、実践しながらスポーツに親しむことが求められています。

②ICTなどのデジタル技術革新の進展

ICT*、AI*（人工知能）、VR*・AR*などの技術開発が急速に進展しています。これらの技術は、新しい産業の創出・発展や企業の生産性向上のみならず、人々の働き方やライフスタイル、健康管理、教育など、市民の生活に関わるあらゆる分野での活用が期待されています。スポーツ分野においても、個人・法人を問わないトレーニング動画のオンライン配信*や、VR・ARを活用した新たなスポーツなど、多様な楽しみ方の創出が期待できます。

③健康寿命の延伸と人生100年時代の到来

日本人の健康寿命は世界最高水準であり、更なる延伸が予想されています。こうした背景を受け、政府は「人生100年時代構想会議」を立ち上げ、幼少期から高齢者まで全ての人々が元気に活躍し続けることのできる社会の実現を目指しています。人生100年時代の基盤は一人ひとりの心身の健康であり、スポーツは市民の健康づくりや仲間づくりに寄与する活動として期待できます。

④多様性を認め合うまちの実現

「共生社会」とは、これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会であり、国は、このような社会を目指すことを最も積極的に取り組むべき重要な課題と捉えています。

これからは、スポーツに親しむ場においても、性別、年齢、ライフスタイルの違いや障害の有無、国籍や性自認*、性的指向*等の違いを超え、多様性を尊重し合い、人権が守られることが重要です。

⑤国連によるSDGsの採択

SDGs（持続可能な開発目標）は、平成27年9月の国連サミットで採択された令和12年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するため、健康や教育、ジェンダー平等など17のゴール・169のターゲットから構成され、「地球上の誰一人として取り残さない」ことを目指しています。スポーツは健康、教育、コミュニティ強化などに寄与するものとして期待されています。スポーツ庁は、このSDGsの達成にスポーツで貢献しようという姿勢を見せています。

⑥高齢化の進展

全国的に人口減少傾向が加速する中、武蔵野市の人口は直近5年間で約4,000人増加しており、令和3年10月1日時点では約14万8,235人です。平成30年に市で実施した人口推計では、令和5年には15万人を突破し、令和30年には約16万2千人になると推計しており、増加する見込みとなっています。

将来年齢3区分人口（日本人人口）の比率をみると、65歳以上の老年人口比率は平成27年の21.8%から令和30年に31.8%に達し、特に後期高齢者*の割合が増加することが見込まれています。

⑦国際スポーツ大会のレガシー

令和元年にはラグビーワールドカップ2019™が開催され、開幕前の予想を大きく上回る盛り上がりを見せました。また、東京2020大会は新型コロナウイルス感染症の影響により、開催年が令和3年に延期となりましたが、安心・安全に大会を開催することができました。

このような国際スポーツ大会を契機に、市としても老若男女障害の有無に関わらずスポーツの楽しみを享受できるよう様々な活動に取り組んできました。スポーツボランティア、パブリックビューイング*、海外チームとの交流、スポーツに対する機運の高まりなど、レガシー*を活かした取組が求められます。

⑧サービスのパーソナライズ化

人々のライフスタイルや意識の多様化が進む中、一人ひとりの暮らしの状況に応じたサービスの在り方が求められています。スポーツにおいても、一人ひとりの身体づくりや、興味・関心、能力などが異なるがゆえに、スポーツメーカーやトレーニングジムなどでは様々なサービスのパーソナライズ化を進めています。

市においても、一人ひとりの意識や状況に留意しながら、限られた資源を効果的・効率的に活用したスポーツサービスを提供することが必要です。

(2) 政策動向の変化

①国の動向

国は、平成 27 年に策定された「第 2 期スポーツ基本計画」に基づき日本のスポーツ政策を推進しており、スポーツを「する」「みる」「ささえる」参画人口の拡大を目指し、成人の週 1 日以上スポーツ実施率を 65%以上にすることを目標に掲げています。また、スポーツ環境の基盤となる「人材」と「場」の充実として、指導者やボランティアの育成・確保、総合型地域スポーツクラブの質的充実、スポーツ施設やオープンスペースの有効活用等のスポーツに親しむ場の確保を推進しています。

令和 3 年 4 月には、スポーツ庁のスポーツ審議会において、第 3 期スポーツ基本計画の部会が設置され、令和 4 年 3 月末の策定を目指し審議が進められています。第 3 期スポーツ基本計画では、特に踏まえるべき観点として、障害者、女性、子ども、高齢者等、多様な主体のスポーツへの参画や、行政、スポーツ団体、学校、民間事業者との連携・協力、デジタル技術をはじめとした新技術やデータの活用などがあげられています。

②東京都の動向

東京都は、障害者スポーツの推進を含めた「東京都スポーツ推進総合計画」を平成 30 年に策定し、スポーツを通じた「健康長寿の達成」「共生社会の実現」「地域・経済の活性化」を施策の柱として位置付け、スポーツ振興施策を推進しています。スポーツ実施の促進にあたっては、都民のスポーツへの関心・行動の段階により施策が異なると考え、「関心喚起策」「実行促進策」「継続支援策」の 3 つの視点による施策を展開しています。

2. これまでの取組の実績と評価

本市では「武蔵野市スポーツ振興計画（平成 21 年度～平成 30 年度）」「武蔵野市スポーツ振興計画一部改定（平成 28 年度～令和 3 年度）」に基づきスポーツ施策を展開してきました。施策の柱に沿ってこれまでの取組の実績と評価を整理します。詳細につきましては、「武蔵野市ホームページ＞トップページ＞市政情報＞意見募集・アンケート＞パブリックコメント」に掲載している資料をご参照ください。

（1）きっかけづくりの充実【広げる】

未就学児、親子、小学生、若者から中高年など様々な世代に向けたプログラムを提供し、生涯を通じてスポーツを楽しむ機会を提供しました。シルバースポーツ大会、地域健康クラブ、社会活動センター健康講座、健康やわら体操など高齢者向けのプログラムも数多く実施し、体力の維持・向上と健康づくりにつなげてきました。

ファミリースポーツフェア*、市民スポーツフェスティバル*など、幼児から高齢者まで、家族でも気軽に参加できるイベントを開催し、スポーツをはじめのきっかけづくりとなりました。サンタさんと親子運動会や親子稲作体験*では、親子で楽しむことによるコミュニケーションの創出にも寄与することができました。

スポーツ祭東京 2013（国体・全国障害者スポーツ大会）に関連したイベントや東京 2020 大会等へ向けた Sports for All イベント*では、スポーツを観る楽しみや一流の選手と触れ合う機会を創出しました。

（2）継続するための仕組み【つなぐ】

一人でもできるウォーキング、気軽に参加できるワンデーレッスン、日頃の活動の成果を発揮することができる市民体育大会・市民体育祭やアクアスロン*大会など様々なプログラムを提供しました。

アウトドアスポーツやシーズンスポーツの促進では、継続性への工夫として季節に応じた変化を取り入れました。アウトドアスポーツは若者世代の参加が少ない傾向にあり、シーズンスポーツは満足度が高い傾向にありました。

（3）既存資源の有効活用【活かす】

学校施設を活用した市民スポーツデー*、特色ある公園づくり、プレーパーク、スポーツ教室のアウトリーチ*事業など、学校や公園、コミュニティセンターなどの既存施設を、スポーツを実施する場として有効活用しました。

武蔵野市体育協会では、指導者養成講習会や指導者実技研修会を実施し、指導者の養成と資質向上、地域における担い手づくりにつながりました。

(4) ライフスタイルの構築【育む】

青少年関係団体への支援、中学生・高校生リーダー養成講座の開催、むさしのジャンボリー*の実施により、スポーツを通じた社会性の形成や青少年の健全育成に資することができました。

子育てに追われてスポーツを行う機会が少ない子育て世代を対象に、コミュニティセンターなどで託児付きの子育てママのスポーツ教室を開催し、心身ともにリフレッシュする機会を提供しました。

(5) 情報提供の充実【伝える】

市民のニーズの把握及び実施したイベント・事業の評価・見直しを図るために、アンケート調査やヒアリング調査を実施してきており、継続して行います。

市内で行われている健康づくり活動を紹介する活動情報誌を配布し情報提供を行いました。今後は、紙媒体に加えてホームページ等でも情報提供を行い、柔軟な発信に取り組みます。

武蔵野市体育協会や武蔵野生涯学習振興事業団などのスポーツ関連団体等のホームページの充実と更新を図り、魅力あるスポーツ関連情報を提供しました。

(6) 連携づくり【支える】

野外活動サポートスタッフ*を育成し事業運営に協力を得ていますが、登録スタッフの高齢化が進んでいます。

健康づくり人材バンクにより登録した講師が、地域に出向き健康講座を実施することで、市民のニーズに応じたサービスを提供できました。

(7) スポーツの振興・啓発

東京 2020 大会等の開催を機に、様々な Sports for All イベントを開催し、子ども達をはじめとする市民が一流の選手やチームに触れる機会、感動体験を提供しました。

武蔵野市を拠点として活動するチームへの広報支援や、ゆかりある選手を応援し情報提供することで、地域が一体となって応援する気運の醸成を図りました。

ラグビーワールドカップ 2019™の公認チームキャンプ地誘致や、東京 2020 大会でのルーマニアのホストタウン*、関連イベントの実施により、スポーツを通じた感動の共有、一体感の創出、国際交流に寄与しました。

スポーツボランティア「HANDS」*、むさしのジュニア特派員*、ホストタウンサポーター*など、ボランティア活動への機運醸成を図ることができました。

(8) 学校教育との連携

タグラグビー*授業支援、バレーボール授業支援、市内中学校総合体育大会の開催、「夢・未来」プロジェクト*によるアスリート派遣などにより、運動習慣の定着と体力向上を目的とした教育活動の充実を図りました。

パラリンピック教育支援やジャパンパラボッチャ競技大会の誘致、ボッチャ武蔵野カップなどの障害者スポーツの体験や大会観戦を通じて、障害者理解を深めることができました。

ルーマニアとの相互交流を通して、自国文化、他国文化、国際理解の促進を行いました。

(9) 生涯学習事業との連携

東京 2020 大会に向けた児童用図書の展示を行い、児童が世界に興味を持つきっかけをつくりました。

武蔵野地域五大学共同教養講座や武蔵野市寄付講座において、オリンピックやパラリンピックをテーマとした講演や連続講座を開催し、スポーツに親しむ機会を座学により提供しました。

運動していない女性のためのストレッチイベントや子どものスポーツ活動を支える人材へのセミナーを開催し、スポーツを通じた身体、健康、メンタル等に関する学びの機会を提供しました。

(10) 障害者スポーツの推進

武蔵野生涯学習振興事業団主催事業として、障がい者スポーツ教室等を開催しました。

パラアスリートを授業に招き、子ども達が障害者スポーツの体感や選手と交流を深めるパラリンピック教育支援を行いました。

ボッチャ競技における日本初の国際大会となるジャパンパラボッチャ競技大会や日本パラバレーボール選手権を誘致したほか、ボッチャ武蔵野カップなどを開催し、競技の普及に寄与しました。

ファミリースポーツフェアや Sports for All イベントにおいて、障害者スポーツやユニバーサルスポーツを積極的に取り入れ、障害の有無にかかわらずともにスポーツを楽しむ機会を創出しました。

総合体育館や陸上競技場のバリアフリー化を進め、障害者スポーツの環境整備を行いました。

心のバリアフリー啓発事業などの各種研修を行い、障害者スポーツを支える人材育成や障害への理解を深めました。

(11) 体育施設の改修・整備

総合体育館はメインアリーナ空調設備等の整備、メイン・サブアリーナの特定天井（非構造部材）の改修とそれに伴う1、2階トイレの洋式化を実施しました。

陸上競技場はスタンド下の諸施設等を改修し、チームロッカールームの新設、トイレの洋式化、更衣室の内装改修を行いました。

温水プール・管理棟の内装改修、空調機やろ過機等を更新しました。軟式野球場は外野フェンスの嵩上げを実施しました。

令和元年度に総合体育館、温水プール棟、プール管理棟の老朽化調査を行い、令和2年度には市立体育施設類型別施設整備計画を策定しました。

各施設ともに竣工後も着実に改修を重ねたことにより、国際的な親善試合や国際交流、トップアスリートとの触れ合いの創出に寄与しています。

(12) 他部門との連携

市内の様々な団体・企業・学校等からなる東京2020大会等に向けた武蔵野市実行委員会を立ち上げ、5つの分科会を設置し、ラグビーワールドカップ2019™や東京2020大会へ向けて全市的に取り組みました。

東京2020大会に向けて、友好都市であるブラショフ市があるルーマニアのホストタウンとしていち早く第一次登録をし、スポーツ・文化交流を行い、グローバル化の促進、共生社会の実現を目指すとともに、共生社会ホストタウンとして登録されました。

3. 市民等のスポーツに関する意識・行動

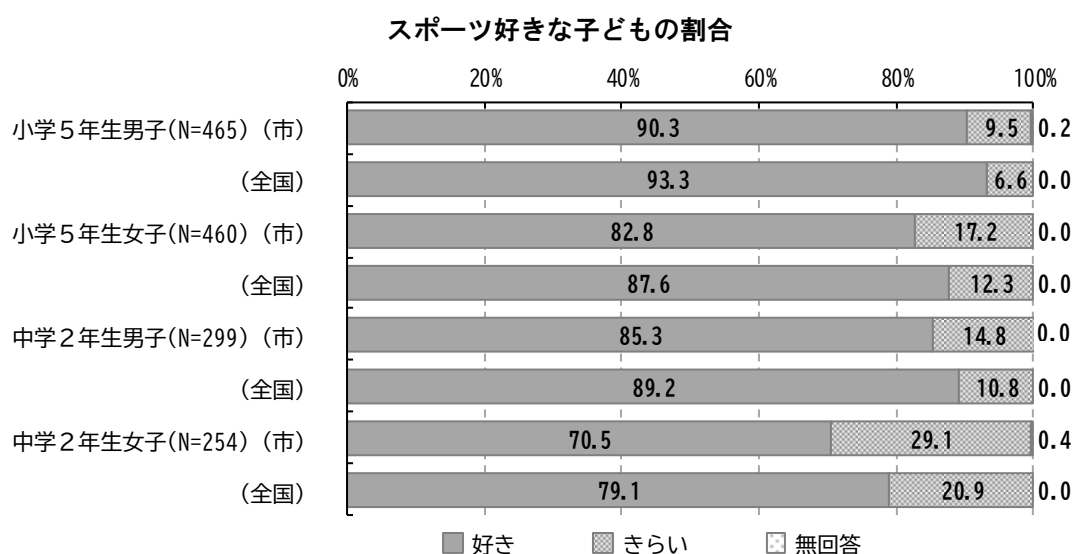
令和2年度に実施した「武蔵野市のスポーツ・運動に関するアンケート調査」や、ヒアリング調査、各種統計データ等を整理し、市民のスポーツ活動に関する現状を示します。なお、アンケート調査の概要は参考資料（p72）に載せています。

(1) するスポーツについて

① 子どものスポーツ

本市のスポーツを好きな小学5年生男女、中学2年生男女の割合はそれぞれ全国よりも低く、特に中学2年生女子は約7割と最も低くなっています。

スポーツをきれいな理由は、学年・性別にかかわらず「得意ではないから」が最も多く、スポーツを上手くできなかった経験や周囲の人から認められなかった経験が少なからず「きれい」という意識に影響していると考えられます。



注1) 「好き(きれい)」は「好き(きれい)」と「やや好き(ややきれい)」の合計です。

注2) 「令和元年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」において、上記結果のN数は公開していない。

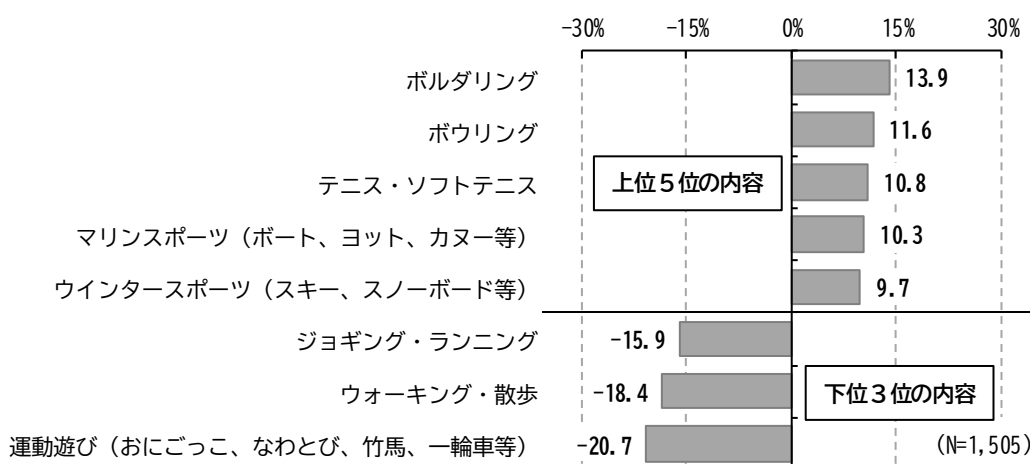
出典：武蔵野市（令和2年度）「武蔵野市のスポーツ・運動に関するアンケート調査」
 スポーツ庁（令和元年度）「令和元年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」

子ども（小学5年生と中学2年生の合計（N=1,505））が過去1年間で体育の授業のほかに、1日30分以上したスポーツ実施内容は、「運動遊び（おにごっこ、なわとび、竹馬、一輪車等）」が最も多く、次いで「ウォーキング・散歩」、「ストレッチ」でした。一方、今後のスポーツ実施希望内容は、「運動遊び（おにごっこ、なわとび、竹馬、一輪車等）」が最も多く、次いで「バドミントン」、「ボウリング」となっています。

この結果を踏まえ、実施内容と実施希望内容との割合の差を算出しました。この差が大きければ大きいほど、現在は実施していないが、今後実施したいという子どもが多いということがわかります。

この差について上位5位までの内容をみると、「ボルダリング」（13.9%）が最も大きく、次いで「ボウリング」（11.6%）、「テニス・ソフトテニス」（10.8%）、「マリンスポーツ」（10.3%）、「ウィンタースポーツ」（9.7%）となっており、レクリエーション要素の強い内容や自然の中で活動するアクティビティのニーズが高いことがわかります。

子どものスポーツ実施内容と実施希望内容との差（上位5位と下位3位）



出典：武蔵野市（令和2年度）「武蔵野市のスポーツ・運動に関するアンケート調査」

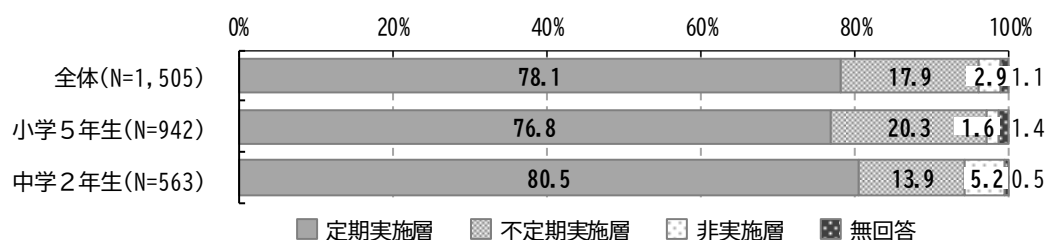
子どもにおける過去1年間のスポーツの実施状況を頻度別に「定期実施層」「不定期実施層」「非実施層」の3つに分類しました。各分類の定義と割合は以下の図表の通りです。

「定期実施層」は小学5年生（76.8%）よりも中学2年生（80.5%）の方が多くなっている一方で、「非実施層」も小学5年生（1.6%）よりも中学2年生（5.2%）の方が多くなっています。この結果から、小学生よりも中学生の方がスポーツ実施の二極化傾向がより顕著となっていることがわかります。

子どもにおけるスポーツ実施状況の分類

分類	定義
定期実施層	過去1年間で体育の授業のほかに1日30分以上スポーツを実施しており、かつ週に1日以上頻度で実施した児童・生徒
不定期実施層	過去1年間で体育の授業のほかに1日30分以上スポーツを実施したが、週に1日未満の頻度で実施した児童・生徒
非実施層	過去1年間で体育の授業のほかに1日30分以上スポーツを実施しなかった児童・生徒

子どものスポーツ実施状況



出典：武蔵野市（令和2年度）「武蔵野市のスポーツ・運動に関するアンケート調査」

②大人のスポーツ

本市全体の週1日以上のスポーツ実施率（68.4%）は全国（60.0%）や東京都全体（57.2%）よりも高く、国が目標として掲げる65.0%を上回っています。

性別×年代別にみると、男性40歳代（53.7%）、女性20歳代（45.7%）が顕著に低くなっており、働き盛り世代や子育て世代といわれるスポーツ実施率に課題があることがうかがえます。

①子どものスポーツと同様に、スポーツの実施内容と実施希望内容との割合の差を算出しました。この差を全体でみると、「登山・ハイキング・釣り」「水泳」が大きくなっており、アウトドアスポーツや水泳のニーズが高いことがわかります。



注) 全国と東京都の結果は「週1日以上」のスポーツ実施率のみ示しています。

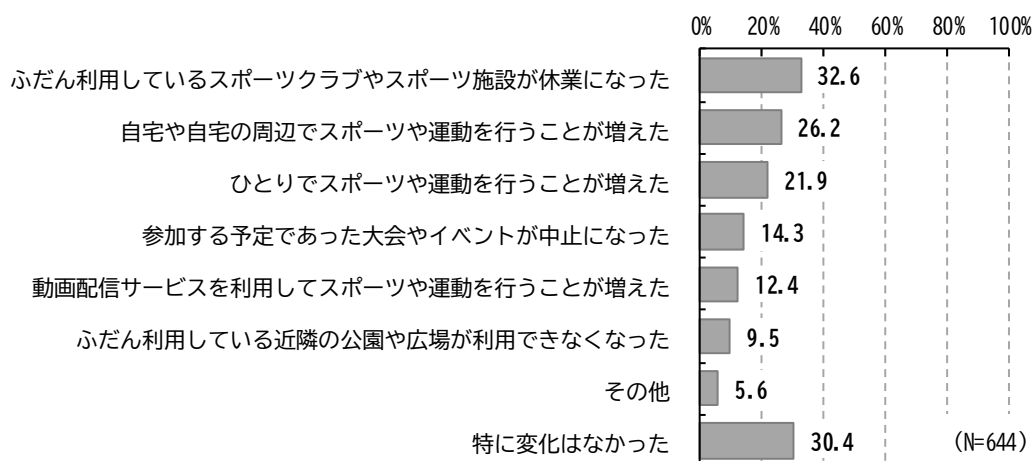
出典：武蔵野市（令和2年度）「武蔵野市のスポーツ・運動に関するアンケート調査」
 スポーツ庁（令和2年度）「スポーツの実施状況等に関する世論調査」
 東京都（平成30年度）「都民のスポーツ活動・パラリンピックに関する世論調査」

新型コロナウイルス感染症の影響によるスポーツ実施状況の変化は、「ふだん利用しているスポーツクラブやスポーツ施設が休業になった」が3割強と最も多く、次いで「自宅や自宅の周辺でスポーツや運動を行うことが増えた」が3割弱、「ひとりでスポーツや運動を行うことが増えた」が2割強となっています。

「施設休業」「大会・イベント中止」というネガティブな変化がみられる一方で、「自宅や自宅周辺」「ひとり」「動画配信」という変化によりスポーツを継続している人もいることがわかりました。

「動画配信」に着目して性別×年代別にみると、女性 20～50 歳代が全体と比べて高くなっています。女性 20～50 歳代における週 1 日以上スポーツ実施率は、それぞれ全体よりも低かったにもかかわらず、「動画配信」と回答した人の割合は全体よりも高くなっていることから、動画配信サービスが女性 20～50 歳代のスポーツ実施率の下げ止まりに一定程度寄与したと考えられます。

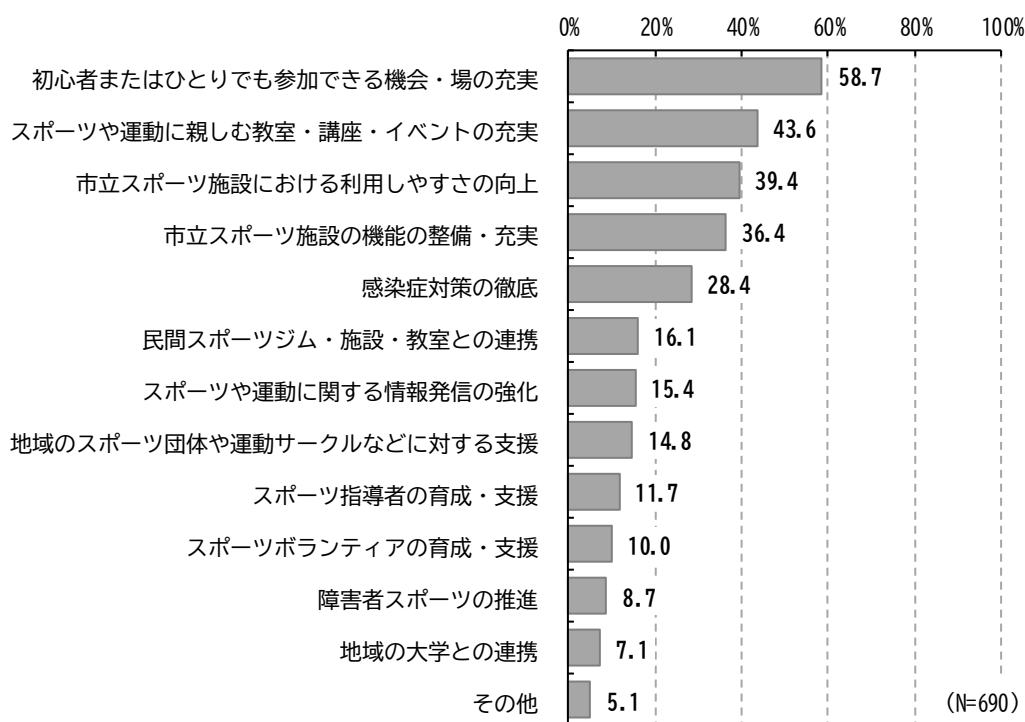
新型コロナウイルス感染症の影響によるスポーツ実施状況の変化



出典：武蔵野市（令和2年度）「武蔵野市のスポーツ・運動に関するアンケート調査」

武蔵野市のスポーツ推進のために今後力を入れるべき取組は「初心者またはひとりでも参加できる機会・場の充実」が6割弱と最も多く、次いで「スポーツや運動に親しむ教室・講座・イベントの充実」が4割強、「市立スポーツ施設における利用しやすさの向上」が約4割、「市立スポーツ施設の機能の整備・充実」が4割弱となっています。「初心者」「ひとり」「機会」「施設の利用しやすさ・機能充実」がキーワードとなっていることがわかります。

武蔵野市のスポーツ推進のために今後力を入れるべき取組

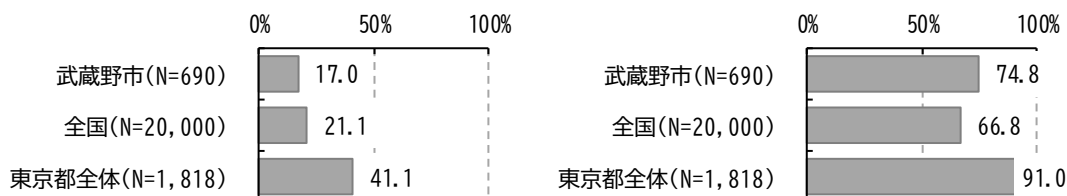


出典：武蔵野市（令和2年度）「武蔵野市のスポーツ・運動に関するアンケート調査」

(2) みるスポーツについて

過去1年間のスポーツ観戦率について、直接観戦率は全国（21.1%）や東京都全体（41.1%）よりも低く、テレビ等（テレビ、ラジオ、インターネット）での観戦率は東京都全体（91.0%）よりも低いが全国（66.8%）よりは高くなっています。

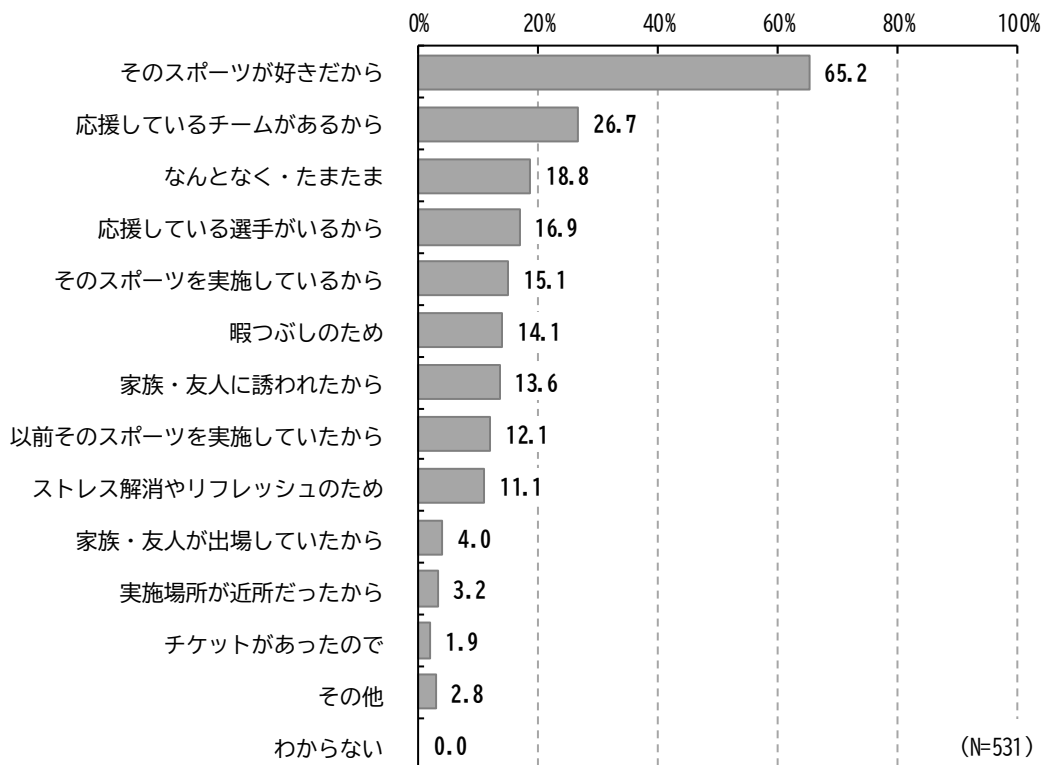
過去1年間のスポーツ観戦率（左：直接観戦率、右：テレビ等での観戦率）



出典：武蔵野市（令和2年度）「武蔵野市のスポーツ・運動に関するアンケート調査」
 スポーツ庁（令和2年度）「スポーツの実施状況等に関する世論調査」
 東京都（平成30年度）「都民のスポーツ活動・パラリンピックに関する世論調査」

スポーツを観戦した理由は「そのスポーツが好きだから」が約6.5割と最も多く、次いで「応援しているチームがある」が3割弱となっており、スポーツ観戦とスポーツ実施、スポーツを支える活動は相互に関連している行為であることがうかがえます。市民の自由意見からは、親子で様々なスポーツを応援・観戦する機会をもっと増やしてほしいというニーズがみられました。

スポーツを観戦した理由



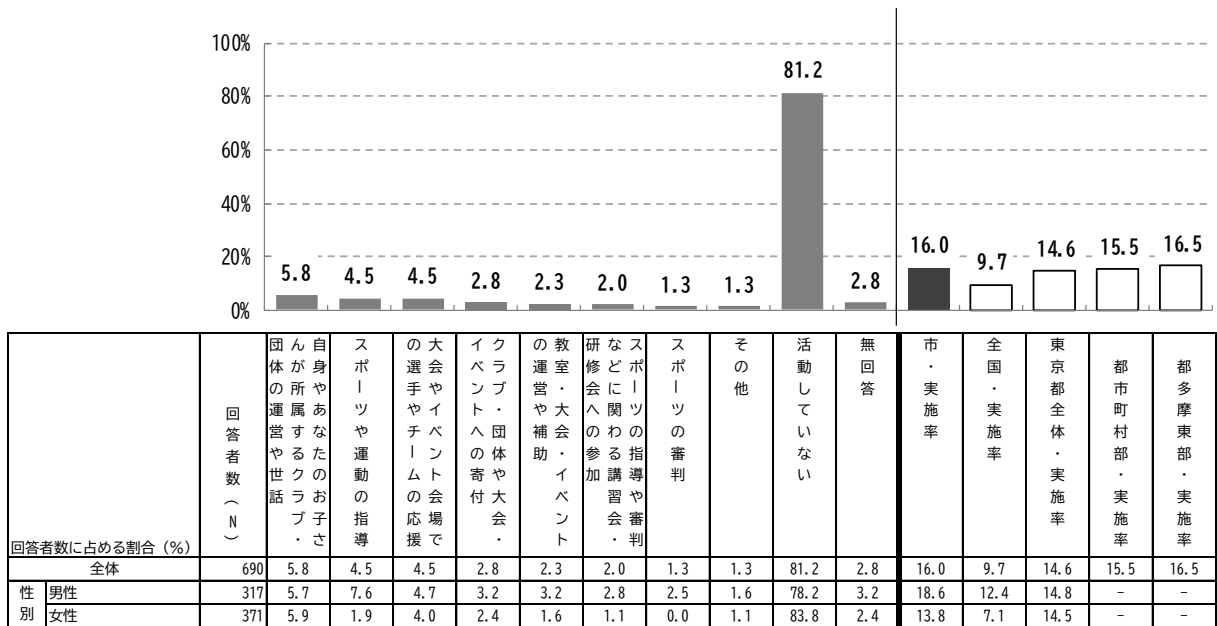
出典：武蔵野市（令和2年度）「武蔵野市のスポーツ・運動に関するアンケート調査」

(3) ささえるスポーツについて

過去1年間のスポーツボランティアの実施率(16.0%)は全国(9.7%)や東京都全体(14.6%)よりも高くなっています。活動内容をみると、「自身やあなたのお子さんが所属するクラブや団体の運営や世話」が最も多く、次いで「スポーツや運動の指導」「大会やイベント会場での選手やチームの応援」となっており、「団体の運営や世話」「指導」「応援」がキーワードとなっていることがわかります。

実施率を性別にみると、男性の方が女性よりも高く、特に「スポーツや運動の指導」が多いことから、スポーツの現場では男性の指導者が多いことがわかります。

過去1年間のスポーツボランティア実施内容

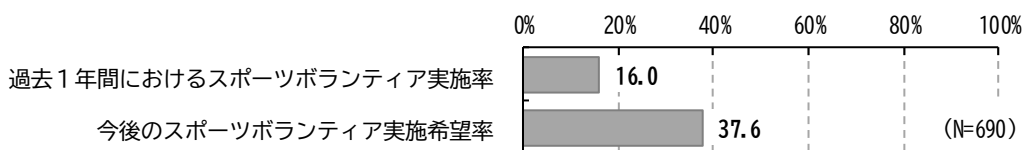


出典：武蔵野市（令和2年度）「武蔵野市のスポーツ・運動に関するアンケート調査」

今後のスポーツボランティア実施希望率(37.6%)は、過去1年間のスポーツボランティア実施率(16.0%)の2倍以上であり、市民のニーズの高さがうかがえます。

スポーツボランティアを実施するきっかけや実施者を増やすために必要な取組について、一般市民は「機会、きっかけがあれば」「短時間でも行える活動であれば」「ひとりでも参加しやすい活動であれば」「自宅、職場、学校などから近い場所であれば」であり、「機会」「短時間」「ひとり」「近い場所」がキーワードとなっていることがわかります。一方、関係団体は「体力面で負担がかかれば」という回答も多く、「体力面での負担」を感じていることがうかがえます。

過去1年間のスポーツボランティア実施率と実施希望率



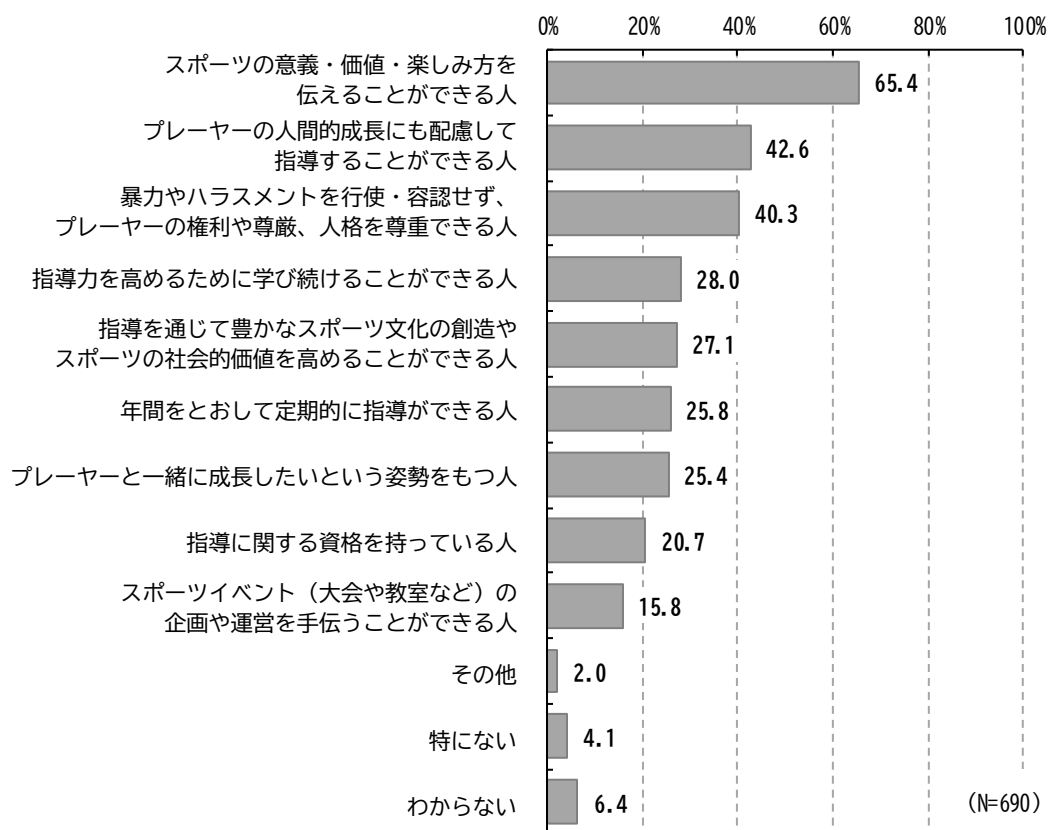
出典：武蔵野市（令和2年度）「武蔵野市のスポーツ・運動に関するアンケート調査」

大人がスポーツ指導者に求める資質は、「スポーツの意義・価値・楽しみ方を伝えることができる人」が約6.5割と最も多く、次いで「プレイヤーの人的成長にも配慮して指導することができる人」が4割強、「暴力やハラスメントを行使・容認せず、プレイヤーの権利や尊厳、人格を尊重できる人」が約4割となっています。

大人にとってスポーツの指導という視点では、勝ち負けで判断する指導ではなく、楽しみ方を伝えたり、人間性や人格を高めたりする指導を望む意見が多いことがわかります。

また、ヒアリング調査によると、子どもが所属するスポーツチームの指導者は、子どもの小学校卒業とともに辞めることが多く、指導者の確保に向けて、単なるスポーツの指導という側面だけではなく、地域の人とのつながりやコミュニティを形成するきっかけになるということもPRすべきという意見もありました。

スポーツ指導者に求める資質

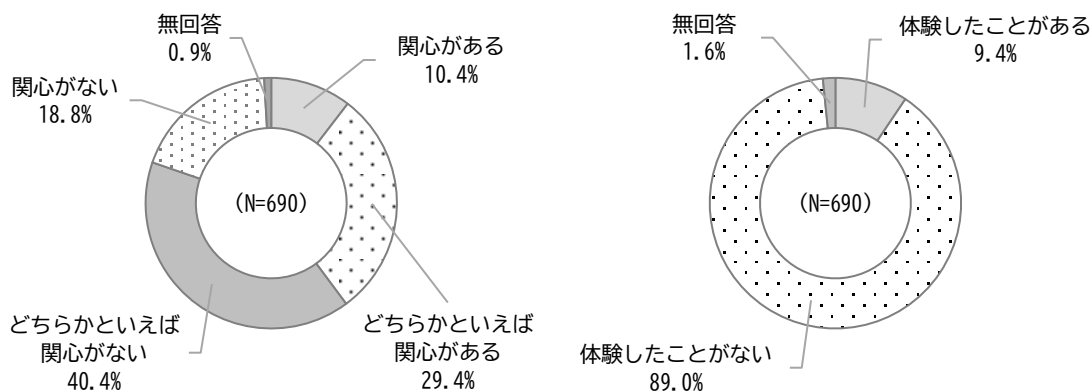


出典：武蔵野市（令和2年度）「武蔵野市のスポーツ・運動に関するアンケート調査」

(4) 障害者スポーツについて

障害者スポーツに対する関わり状況をみると、関心がある人（「関心がある」と「どちらかといえば関心がある」の合計）は約4割、体験したことがある人は約1割となっています。障害者スポーツを体験したことがない理由は「身近に障害者スポーツに関わっている人がいないから」「障害者スポーツを身近な場所でやっていないから」が多く、障害者スポーツに馴染みがないことがうかがえます。

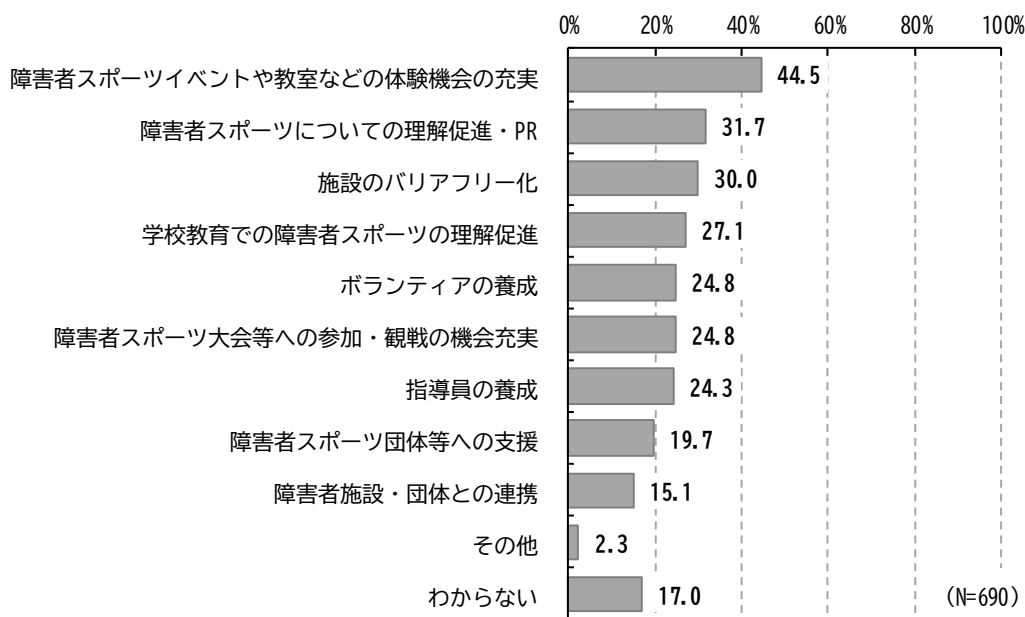
障害者スポーツに対する関わり状況（左：関心の有無、右：体験の有無）



出典：武蔵野市（令和2年度）「武蔵野市のスポーツ・運動に関するアンケート調査」

障害者がスポーツを実施しやすい環境づくりのために必要な取組は、「障害者スポーツイベントや教室などの体験機会の充実」が約4.5割と最も多く、次いで「障害者スポーツについての理解促進・PR」が約3割、「施設のバリアフリー化」が3割であり、キーワードは「機会」「理解」「バリアフリー」であることがわかります。

障害者がスポーツを実施しやすい環境づくりのために必要な取組



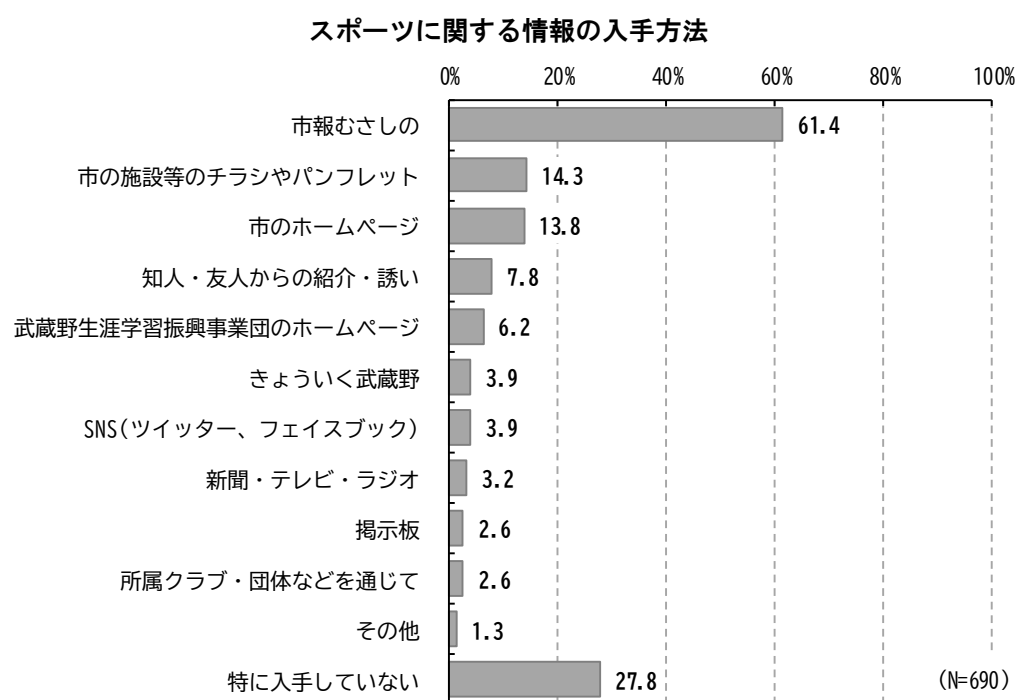
出典：武蔵野市（令和2年度）「武蔵野市のスポーツ・運動に関するアンケート調査」

(5) 情報社会におけるスポーツについて

本市のスポーツに関する情報の入手方法は「市報むさしの」が6割強と最も多く、次いで「市の施設等のチラシやパンフレット」が約1.5割、「市のホームページ」が1割強となっています。

一方、今後の希望入手方法は「市報むさしの」が6割強というのには変わりませんが、次いで「市のホームページ」が3割弱、「市の施設等のチラシやパンフレット」が約2割と、上位2位と3位の順位が入れ替わっています。

希望入手方法の割合と現在の入手方法の割合の差をみると、「市のホームページ」が最も大きく、次いで「SNS*(ツイッター、フェイスブック)」となっており、ICTを活用した情報発信が求められてることがわかります。



出典：武蔵野市（令和2年度）「武蔵野市のスポーツ・運動に関するアンケート調査」

(6) スポーツ施設の整備について

① 武蔵野総合体育館

武蔵野総合体育館の設備等に対する満足度をみると、「開館時間の適切さ」(89.5%)が最も多く、次いで「1回の利用時間帯の適切さ」(87.6%)、「施設の清潔さ」「感染症対策の徹底」「職員・スタッフの対応の良さ」(同率 84.8%)となっています。

武蔵野総合体育館の設備等の満足度と重要度から、重要にもかかわらず満足していない項目を抽出すると、「トイレの快適さ」「防犯上の安全さ」「施設情報のわかりやすさ」となっており、優先的な課題であることがわかります。

武蔵野総合体育館の改修工事に期待することについて、成人等、関係団体、施設利用者の3つの対象で上位5項目を比べたところ、全ての対象で「広くてきれいな更衣室・シャワー・パウダールーム・洋式トイレ等の設置」が1位となっています。また、「感染症対策の徹底（非接触式の水栓、換気設備、ゆとりある空間の確保）」は全ての対象で3割を超えています。

「カフェやラウンジの併設」は、成人等と比べて関係団体及び施設利用者の割合が高く、武蔵野総合体育館に親しみのある人からより期待されているとうかがえます。

「性別」にみると、女性は男性よりも「広くてきれいな更衣室・シャワー・パウダールーム・洋式トイレ等の設置」と「感染症対策の徹底（非接触式の水栓、換気設備、ゆとりある空間の確保）」が10ポイント以上多くなっています。

「年代別」にみると、30歳代以下は「トレーニングジムスペースの十分な確保」や「カフェやラウンジの併設」が多い一方、40歳代以上は「感染症対策の徹底（非接触式の水栓、換気設備、ゆとりある空間の確保）」が多くなっており、年代により異なる傾向が認められました。

ヒアリング調査では、「広い更衣室」「収容台数の多い駐車場」「キッズスペースの設置」「大会等の生配信やライブ中継ができる通信環境の充実とライブカメラの常設」「利用しやすい場所にある駐輪場」「明るい照明」「わかりやすい案内図」などを求めている声が確認できました。

②武蔵野温水プール

武蔵野温水プールの設備等に対する満足度をみると、「利用料金の適切さ」(97.2%)が最も多く、次いで「1回の利用時間帯の適切さ」(92.9%)、「職員・スタッフの対応の良さ」(91.4%)、「開館時間の適切さ」(90.0%)、「感染症対策の徹底」(85.7%)となっています。

武蔵野温水プールの設備等の満足度と重要度から、重要にもかかわらず満足していない項目を抽出すると、「トイレの快適さ」「更衣室・シャワー等の充実さ」「施設の清潔さ」「防犯上の安全さ」「施設情報のわかりやすさ」となっており、優先的な課題であることがわかります。

武蔵野温水プール（屋内プール）や武蔵野プール（屋外プール）の改修工事に期待することについて、武蔵野総合体育館と同様に上位5項目を比べたところ、全ての対象で「広くてきれいな更衣室・シャワー・パウダールーム・洋式トイレ等の設置」が1位、「感染症対策の徹底（非接触式の水栓、換気設備、ゆとりある空間の確保）」が2位となっています。

「ジャグジーの設置」は、成人等と比べて関係団体と施設利用者の割合が高く、武蔵野温水プール（屋内プール）や武蔵野プール（屋外プール）に親しみのある人からより期待されているとうかがえます。

「性別」にみると、武蔵野総合体育館と同様に、女性は男性よりも「広くてきれいな更衣室・シャワー・パウダールーム・洋式トイレ等の設置」と「感染症対策の徹底（非接触式の水栓、換気設備、ゆとりある空間の確保）」が多くなっています。

「年代別」にみると、30歳代は「現在屋外にある幼児プールの屋内化」が多くなっており、子育て世代の特徴がうかがえます。

ヒアリング調査では、「飛び込み専用レーンの設置」「遊泳コースの増設」などを求めている声が確認できました。

4. 市のスポーツ環境

(1) スポーツを支える担い手

市内の主なスポーツ支援団体やスポーツ活動団体、スポーツ関連団体は次の通りです。

市内の主なスポーツ団体等

分類	団体名	活動内容等
スポーツ支援団体	武蔵野市体育協会加盟団体	活動内容：生涯学習スポーツの振興を図り、市民の健康増進に寄与するため、市民体育大会、市民スポーツフェスティバルをはじめ、各種大会や教室、ジュニア育成事業等を開催。 種目数：36 種目 加入団体数：320 団体 加入者数：9,259 名（令和2年度）
	武蔵野市スポーツ推進委員協議会	活動内容：市民のスポーツ推進のため、学校や福祉施設等からの依頼により、スポーツ指導や審判、介護予防の取組である「いきいきサロン*」等、スポーツ・レクリエーション活動の企画・運営補助を行う。年1回の大きなイベントとしてファミリースポーツフェア（武蔵野市教育委員会との共催）を企画・開催し、その他市のスポーツイベントにも協力している。近年は障害者スポーツの普及にも力を注いでいる。 委員数：27 名（令和3年10月1日現在。男性12名、女性15名。）
スポーツ活動団体	青少年関係団体	活動内容：市内を拠点として、子ども会・野球・サッカー・文化事業等の青少年健全育成を目的として活動。 種目数：11 種目 登録団体数：36 団体（令和3年度）
	社会教育関係団体	活動内容：自主的、自発的に社会教育活動を行う。 登録団体数：282 団体（令和3年10月1日現在。うちスポーツに関する団体は73団体。）
	（一社）横河武蔵野スポーツクラブ	活動内容：サッカー・ラグビートップチーム及びアカデミー（育成）を運営や、かけっこ教室、個人で参加できるソサイチ、女性限定ゆるフットなどを開催。武蔵野市及び武蔵野市教育委員会と相互協力に関する協定を締結しており、市主催イベント、タグラグビー授業導入支援、スポーツ教室等、各種事業の実施に協力している。
	早朝野球連盟	活動内容：市内在住・在勤の市民で編成されたチームが加盟し、リーグ戦を開催。 加盟チーム数：9 チーム（令和3年度）
	少年野球連盟	活動内容：連盟主催事業として加盟チームが各種大会に参加。武蔵野市からの受託事業として、年3回の野球大会及び審判講習会を開催。 加盟チーム数：11 チーム（令和3年度）

分類	団体名	活動内容等
スポーツ関連団体	教育機関(大学)	<p>武蔵野市内には亜細亜大学、成蹊大学、日本獣医生命科学大学があり、近隣市の武蔵野大学、東京女子大学とともに、武蔵野地域五大学として講演会などの事業を行っている。亜細亜大学、成蹊大学とは、人的交流、情報共有および物的活用を図り、相互に協力して人材育成と地域社会発展に寄与することを目的として、平成26年4月に包括連携協定を締結。市のスポーツ振興に関する複数の事業に大学教員や学生が携わっている。また、杏林大学とも令和2年1月に包括的な連携協定を締結している。</p> <p>教員：第二期武蔵野市スポーツ振興計画（仮称）策定委員会、武蔵野市オリパラ実行委員会委員、ラグビー授業導入支援など</p> <p>学生：スポーツ推進委員（4名）、ラグビー授業導入支援、野外活動センター体験事業、市主催スポーツイベントへの協力など</p>
	(公財)武蔵野生涯学習振興事業団	<p>市立スポーツ施設のほか、武蔵野プレイス、吉祥寺図書館、自然の村の指定管理者として施設を管理・運営し、市民の生涯学習及び活動の支援並びにスポーツ振興に関する事業（教室やイベント開催、施設の個人開放、情報発信等）を実施している。</p>
	(公財)武蔵野健康づくり事業団	<p>「自分の健康は自分で守ろう！」を合言葉に、「健康づくり推進員*」、「健康づくり人材バンク*」、「健康づくりパートナー*」を三本柱として、市民の健康づくりを応援している。専門性と地域とのつながりを活かした市民の主体的な健康づくりを、対象者層に合わせて支援している。</p>

(2) スポーツを楽しむ場・施設

市内の主なスポーツ施設や公園等は次の通りです。

市内の主なスポーツ施設や公園等

施設種別	具体的な施設・施設数等
市立スポーツ施設	武蔵野総合体育館 武蔵野温水プール・武蔵野プール 武蔵野陸上競技場 緑町スポーツ広場 武蔵野庭球場 武蔵野軟式野球場 ストリートスポーツ広場 東部スポーツ広場
市立小中学校（学校施設開放）	小学校：12校（校庭、体育館） 中学校：6校（校庭、体育館、テニスコート、武道場（一部）、温水プール（四中のみ）） ※利用には団体登録が必要
都立高等学校（学校施設開放）	2校（いずれもグラウンド、テニスコート） ※利用には団体登録が必要。
市立公園	広場や健康遊具がある公園は27か所 ※団体使用の場合は使用許可申請が必要
都立公園	3園 井の頭恩賜公園、小金井公園、 武蔵野中央公園・武蔵野中央公園スポーツ広場
コミュニティセンター	20か所 ※施設により体育室や卓球台、健康体操等で利用可能な部屋あり
民間スポーツ施設	44施設 ※地図を作成する時点で市が存在を把握し、かつ掲載の許可があった施設数 出典：武蔵野市（令和2年2月）「ココ KARA スポーツ! むさしのスポーツマップ&ガイド 第5版」
その他	武蔵野プレイス（館内に卓球、ボルダリング、軽運動ができる無料のオープンスペースあり）

5. 課題のまとめ

(1) 誰もがスポーツを楽しめる機会の創出

子ども向けのスポーツ教室は力を入れて実施してきましたが、全国と比べるとスポーツを好きな子どもの割合は低く、さらに、小学生よりも中学生においてスポーツ実施の二極化傾向がより一層顕著となっていることもわかっています。

トップアスリートや民間スポーツクラブ等との官民連携により、スポーツの魅力や基本的な運動動作の向上に資する技術や知識を伝える機会や、レクリエーション要素の強い活動の機会の提供など、子どもに関心の高いテーマと連動させた取組が必要です。

本市は週1日以上スポーツ実施率が全国や東京都と比べて高くなっています。この結果は、全ての市民に対してスポーツを実施する機会や場を着実に提供してきた取組実績に加えて、他都市では実施率の低いとみなされる女性や小さな子どもがいる家族向けの教室や、総合体育館に通いづらい高齢者をはじめとする市民向けのアウトリーチ事業といった取組の影響も一部反映されていると考えられます。

一方、子育て世代・働き盛り世代のスポーツ実施率は他の年代と比べて低くなっており、これまでも事業対象としてきた女性や高齢者などとともに力を入れて取り組む対象として位置付ける必要があります。

また、武蔵野市のスポーツ推進のためには「初心者またはひとりでも参加できる機会・場の充実」が求められていますが、これまでスポーツを実施してきた人はきっかけづくりよりも、日頃の活動の成果を発揮する場に参加していると考えられることから、スポーツに対する関心・行動の段階に応じた取組が求められます。

過去1年間にスポーツを実施していない1割弱の市民にとってニーズの高いスポーツはウォーキングでしたが、スポーツを実施した9割強の市民は野外活動や水泳などのニーズが高いことがわかりました。子どもも含め、競技性の強いスポーツだけではなく、自然の中で活動するシーズンスポーツやアウトドアスポーツなどの取組の充実が求められます。

東京2020大会の開催を契機に、スケートボードやスポーツクライミング、自転車(BMX フリースタイル)などのアーバンスポーツ*への関心が高まり、新たなスポーツの楽しみ方が広がりました。

また、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、動画配信サービスを利用してスポーツを実施することが増えた市民は一定程度いることがわかっています。本市が既に配信している動画や、スポーツ庁や著名アスリート等が配信している様々な動画を組み合わせ、市民のニーズに応じた動画コンテンツを提供することが必要です。さらに、ICTの技術革新の進展によりVR・ARなどを活用したスポーツもより一層普及すると考えられます。スポーツの新たな楽しみ方の創出やスポーツ実

施率の向上、障害者がスポーツに親しみやすい環境整備に向けて、ICTの活用方法を検討する必要があります。

(2) 障害者スポーツの推進

障害者を対象とした身体を動かすための取組は実施してきましたが、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、障害の無い市民と同様、障害者も運動不足に陥っており、寄り添った支援も受けづらい状況となっています。

外出できない障害者が自宅でも取り組めるプログラムや、身近な居場所・施設において緩やかなレクリエーションやスポーツに親しめる機会の創出が必要であるとともに、障害者においてもスポーツに対する関心・行動の段階に応じた取組が求められます。

障害者を支える人材として、障害の種別や程度の違いへの配慮ができることは前提としつつ、福祉の専門的なサポート人材だけではなく、見守りや付き添いなどの非専門的なサポート人材も必要とされています。また、他分野や他団体等と連携し、障害者のスポーツ活動を生涯にわたり切れ目なく支援することも重要です。

さらに、障害者がより一層スポーツを楽しむことができるように、スポーツ施設のバリアフリー化や参加しやすさに配慮した情報発信などを行うことも必要です。

東京 2020 大会の開催決定を契機に、障害者スポーツの普及・啓発により、障害への理解を深め、共生社会の実現に向かう機運が高まっています。本市では、パラリンピック競技種目のボッチャ大会の開催環境が整っており、障害者スポーツを体験したり、観戦したりすることで、障害者スポーツに興味を持つきっかけにつながります。今後も障害者スポーツの推進を通して障害への理解を深める取組が必要です。

(3) スポーツを支える担い手づくりと活動支援

一般市民にとって、スポーツ指導者には、勝ち負けで判断するのではなく、人間性や人格を高める指導を望む意見が多いことがわかったことから、この点を踏まえて資質向上のための取組を実施する必要があります。また、指導者の確保・定着にあたっては、単なるスポーツの指導という側面だけでなく、地域の人とのつながりや交流が育まれるように促すとともに、活動の場を提供し続けることが重要です。

子どもがスポーツ指導者に最も求めることは技術・知識であり、さらに学校運動部活動の地域移行化が進むと考えられることから、部活動指導員の確保・定着に向けた取組が必要となります。

スポーツボランティア実施希望率は実施率の2倍以上となっており、市民全体のニーズの高さがうかがえます。スポーツを支える新たな担い手を増やすためには、敷居が高く負担の大きいものではなく、一人ひとりの興味・関心、ライフスタイル、体力などが異なることから、その違いがあっても参加できる仕組みや、緩い関わりへの許容、負担を広く浅く分配する工夫が必要です。さらに、スポーツを支える担い手づくりにおいても、スポーツボランティアに対する関心・行動の段階別の支援が必要です。

男性の方が女性よりもスポーツボランティアを実施していることがわかっていますが、今後も、女性のスポーツも推進するためには、女性自身が支える担い手となり、さらに指導者としても活動できるような取組が必要です。

加えて、障害のある当事者が自ら講師・教える側となることで障害者から共感が得られるため、当事者が発信者となるような仕組みも求められます。

スポーツボランティアの文化をより一層醸成していくため、子どもの頃からスポーツボランティアを体験できる機会も創出していきます。

本市には武蔵野市体育協会や武蔵野市スポーツ推進委員協議会などのスポーツ支援団体が市民のスポーツ活動を支えています。これまで築いてきた市民のスポーツ環境を今後も守るために、スポーツ支援団体との連携・協働が必要です。また、仲間と定期的に活動する場として重要な役割を担っているスポーツ活動団体への支援も継続します。

さらに、スポーツを実施する場や応援する機会をより一層充実させていくため、これまで連携・協働してきたスポーツ支援団体に加えて、トップスポーツチームや民間企業等との連携を強化することが重要です。

(4) スポーツに親しむ環境づくり

本市には総合体育館をはじめ、陸上競技場などのスポーツ施設やむさしの市民公園などの公園があります。また、学校体育施設の開放も行っています。スポーツをより充実して楽しむためには、スポーツ施設が不可欠であることから、今後も、市内にあるスポーツのできる場の有効活用が必要です。

また、平成元年に竣工した総合体育館は保全や機能向上を目的とした大規模な改修工事の時期を迎えており、老朽化や課題が多いプールについては再整備のあり方について検討が必要です。市民の誰もが市立スポーツ施設を安全安心、快適に利用できるよう、適切に整備を行っていくことが重要です。

市民にとって、本市のスポーツ情報の入手経路は「市報むさしの」が多く、配布している冊子への評価も高いことから、紙媒体での情報発信の重要性がうかがえま

す。一方、ホームページやSNS等のICTを活用した情報の提供も求められています。情報の発信にあたっては、デジタル化に弱い層への配慮や、誰にでも分かりやすいユニバーサルデザインに留意しながら、ウェブ媒体と紙媒体とを組み合わせた情報発信が求められます。

ライフスタイルの変化により、スポーツサービス産業も多種多様化しています。本市のスポーツ施設の情報だけではなく、民間施設も含めたスポーツ関連の情報を集約・発信し、個々人が生活・興味にあった情報を自由に入手できるような提供方法の研究が必要です。

(5) 武蔵野市の特性を生かしたスポーツ文化の醸成

本市が捉えるスポーツ観戦には、オリンピック・パラリンピックやプロスポーツの大会等だけではなく、家族が出場する大会等の観戦や応援も含まれます。

選手やチームの応援は市民のニーズが高い事項であり、ラグビーワールドカップ2019™や東京2020大会の影響を受けて、海外や日本各地から訪れる選手や観戦者をもてなす取組も行われています。一方、新型コロナウイルス感染症の影響により、従来のように観戦できる環境ではなくなりつつあるため、パブリックビューイングやインターネットなど、多様な観戦の在り方を検討する必要があります。

さらに、応援・観戦する理由を創るため、応援するチームや選手を見つけるきっかけづくりや大規模スポーツ大会の誘致も必要です。

本市ではラグビーワールドカップ2019™や東京2020大会の開催を通じて、ラグビーを含めたスポーツの気運を高めてきており、本市にゆかりのあるトップアスリートやトップチームとの交流実績や、東京2020大会のホストタウンとして応援したルーマニアとのつながりも重要なレガシーとして捉えることができます。このような大規模スポーツ大会のレガシーを有効に活用することが重要です。

第3章 基本概念・施策

1. 基本理念・基本方針

(1) 基本理念

武蔵野市の第六期長期計画（令和2年度～11年度）では「誰もが安心して暮らし続けられる魅力と活力があふれるまち」を市の10年後の目指すべき姿として掲げています。

また、市では、これまで武蔵野市スポーツ振興計画で示す考え方や方針に基づき、市民がスポーツに親しむことのできる施策を展開してきました。一方、スポーツを取り巻く社会情勢や政策動向は大きく変化しています。今後も個人のライフスタイルや価値観の多様化が進むと予想される中で、市民一人ひとりがスポーツの価値を享受できるように、スポーツ施策を展開することが必要です。

以上のことを踏まえ、本計画では、性別、年齢、障害の有無などを問わず、市民の誰もがスポーツの魅力や価値を実感し、自由に気軽にスポーツを楽しみ、豊かな生活を送ることができるようなまちを目指します。さらに、スポーツを通して人と人とのつながりを創出し、仲間づくり、地域づくりへと発展しながら魅力と活力があふれる持続可能なまちを目指し、「市民の誰もがスポーツを楽しみ豊かな生活を送り続けられる武蔵野市」を基本理念とし、実現に向けて取り組んでいくこととします。

**市民の誰もがスポーツを楽しみ
豊かな生活を送り続けられる 武蔵野市**

(2) 基本方針

「市民の誰もがスポーツを楽しみ豊かな生活を送り続けられる 武蔵野市」という基本理念を実現するため、施策展開の方向性として、5つの基本方針を掲げ、施策を推進していきます。

I 誰もがスポーツを楽しめる機会の創出

子ども、子育て世代・働き盛り世代、高齢者、女性、障害の有無などに関わらず市民の誰もがスポーツを楽しむための機会をつくり提供します。子どものスポーツ実施率の二極化や、子育て世代のスポーツ実施率の低下など、スポーツに対する関心・行動の段階に応じた取組を行います。

競技性の高いスポーツだけではなく、スポーツをはじめのきっかけとなるレクリエーションや遊びの要素の強いアウトドアスポーツ、シーズンスポーツの推進を図ります。また、東京2020大会を契機に注目を集めたアーバンスポーツなどの多様化するスポーツの紹介やICTを活用したスポーツの推進を図ります。

都心にある武蔵野市として野外活動は重要な取組のひとつです。自然とふれあう楽しみや自然への畏怖などを伝える取組を行います。

II 障害者スポーツの推進

障害のある当事者自身がスポーツを楽しむことができるように、身体を動かすことに対する意欲が高まり、レクリエーションや緩やかなスポーツの経験を重ねて継続的に取り組める機会を創出します。

障害者の誰もがスポーツに安心して親しめるように、障害の種別や程度に配慮しながら人材、施設、情報の面から環境づくりを推進します。

広く障害への理解を深め、共生社会の実現を目指すために、障害者スポーツの体験や観戦の機会を提供するとともに、インクルーシブスポーツ*の普及・啓発を図ります。

III スポーツを支える担い手づくりと活動支援

昨今、社会の関心を集めているスポーツ・インテグリティ*の浸透、部活動の安定した実施に向けた指導者の確保など、指導者に求められる資質とスキルを兼ね備えた人材を育成します。

スポーツを支える人材を増やすため、支える活動そのものの魅力や楽しさを発信し、気軽に参加できる体験の機会をつくります。また、一度体験した人が続けて活動できるように継続の機会を設けます。

スポーツは多様な人材に支えられることで、より実施者の気持ちを理解して寄り添う環境をつくり出すことができます。障害者が自ら教える立場となることや、女性が指導者となることを後押しするような研修などを行います。さらに、子どものボランティア体験の場をつくり、自分が教えてもらった環境に将来戻って指導するといった好循環を生むきっかけにもつなげていきます。

武蔵野市体育協会やその加盟団体、武蔵野市スポーツ推進委員協議会等との連携をより強化するとともに、生涯学習や健康、芸術文化といった他分野や、民間企業・民間のスポーツクラブ等と連携し、スポーツを楽しむ機会や場の充実を図ります。

IV スポーツに親しむ環境づくり

市民のスポーツに親しむ環境を充実するため、既存のスポーツ施設や公園、学校体育施設等を活用し、スポーツの場を提供します。

また、スポーツの価値観が多様化するとともに、市立スポーツ施設が担う役割や可能性も広がっています。このような社会に対応し、その結果スポーツを通して市民が潤いのある豊かな生活を享受することができるように、これらの施設を適正に維持・管理・運営するとともに、計画的に整備・更新を行います。

ホームページやSNSなどのウェブ媒体、チラシやポスターなどの紙媒体などを組み合わせて、情報の内容や対象に合わせた情報発信を行います。また、民間施設も含めてスポーツ関連の情報を集約・発信し、自由に入手できるような提供方法を研究します。

V 武蔵野市の特性を生かしたスポーツ文化の醸成

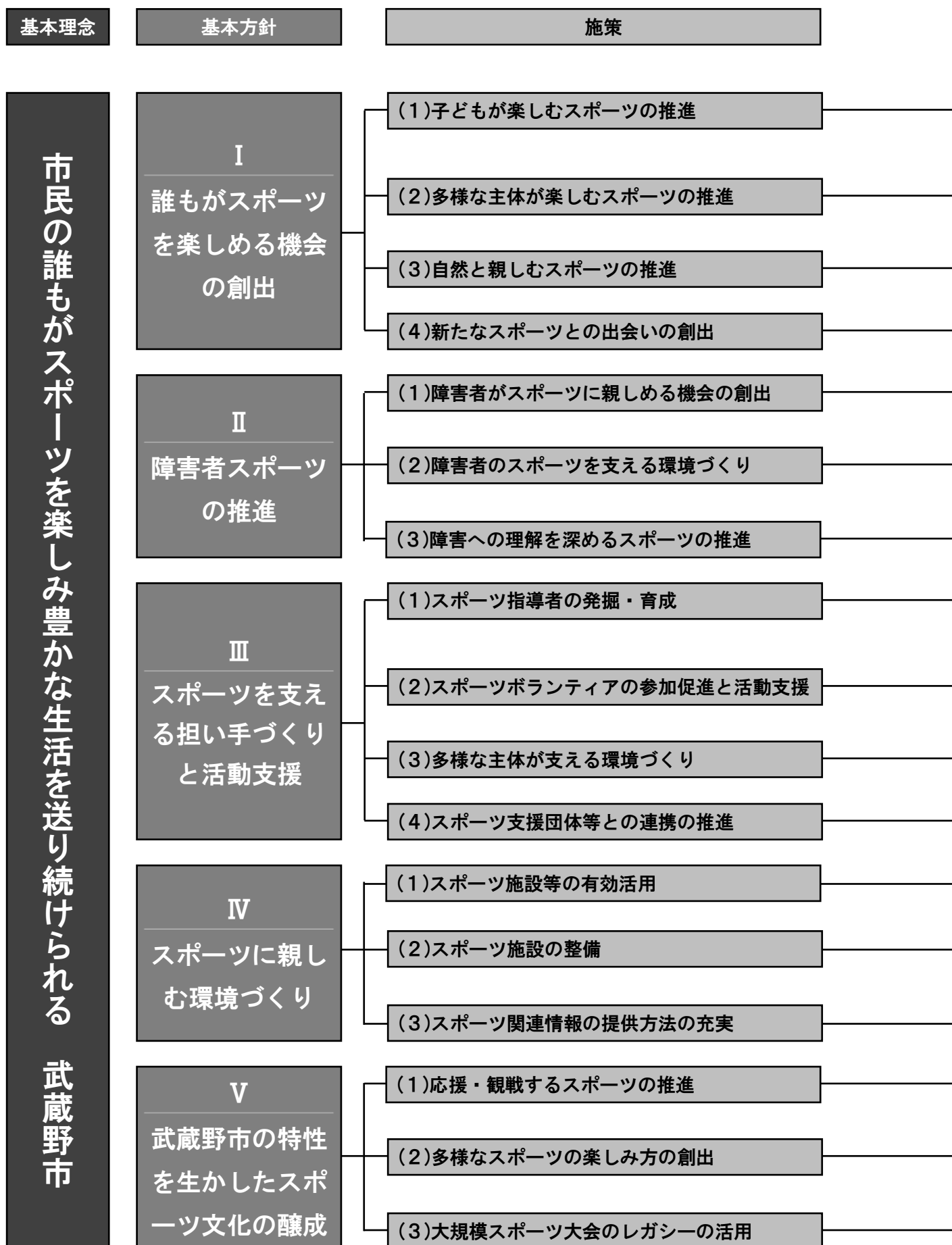
地域の大学や地域で活動するスポーツ団体を応援する機会をつくり、地域の一体感の醸成や地域のつながりを育みます。市にゆかりのあるトップアスリートとの交流機会の提供や、各種競技種目や選手のあゆみなどを紹介することで、より深いスポーツの楽しさの理解につなげます。

観戦する喜びや感動の共有を提供するため、インターネットやパブリックビューイングなどの多様な観戦環境の充実や機会の提供を図ります。

学び知ることはスポーツをより一層魅力的なものにし、スポーツをする動機付けにもなります。音楽等との融合もスポーツの新たな楽しみ方のひとつです。生涯学習・芸術文化等の他分野との横断的な取組を行います。

ラグビーワールドカップ 2019™や東京 2020 大会の開催を契機に実施した取組を通じて築いてきた地域の団体とのネットワーク、チームキャンプやイベント運営のノウハウ、交流の実績を活かし、今後の取組へとつないでいきます。

2. 施策体系



取組

- ① 基本的な運動動作と体力の向上のための取組
- ② スポーツの魅力や楽しさを体感できる機会の提供
- ③ 日頃の練習や活動の成果を披露する場づくり

- ① 子育て世代・働き盛り世代へのスポーツに親しむ機会の提供
- ② 高齢者・女性へのスポーツに親しむ機会の提供
- ③ 多世代の市民へのスポーツに親しむ機会の提供

- ① 自然とふれあう野外活動の充実
- ② シーズンスポーツやアウトドアスポーツの推進

- ① アーバンスポーツなど新たな種目の紹介、普及・啓発
- ② デジタルを活用したスポーツの推進

- ① 障害者が身体を動かす楽しさを体感できる機会の提供
- ② 障害者がスポーツを継続して楽しめる機会の提供

- ① 障害者のスポーツ活動を支える人材育成の取組
- ② 障害者がスポーツに取り組みやすい施設整備の充実
- ③ 障害者の参加のしやすさに配慮した情報発信の充実

- ① 障害者スポーツの魅力や楽しさを実感できる機会の提供
- ② インクルーシブスポーツの普及・啓発と機会の提供

- ① スポーツ指導者の資質向上のための取組
- ② スポーツ指導者の活躍の場を拡げる取組
- ③ 持続可能な部活動の実施に向けた検討

- ① 気軽に参加できるスポーツボランティアの機会の提供
- ② スポーツボランティアの活動継続と定着を図るための取組

- ① 女性や障害者等の活躍の場や指導者へのきっかけづくり
- ② 子どもがスポーツボランティアを経験できる機会の提供

- ① スポーツ支援団体との連携強化
- ② スポーツ活動団体への支援の継続
- ③ スポーツ環境の充実に向けた民間企業等との連携強化

- ① 既存のスポーツ施設や公園、学校体育施設等の場の活用

- ① 総合体育館の大規模改修工事
- ② プールの今後のあり方
- ③ その他の施設

- ① 多様な媒体による情報の発信・拡散
- ② スポーツ関連情報等の集約・活用

- ① 地域のスポーツを応援する機会の提供
- ② 多様なスポーツ観戦環境の充実
- ③ 応援モラルの定着を図るための取組

- ① 芸術文化等の分野横断的なスポーツの楽しみ方の創出
- ② トップアスリートとの交流機会の提供
- ③ スポーツを通じたつながりの創出

- ① 東京 2020 大会等のレガシーの活用
- ② スポーツを通じた国際交流

3. 重点施策

本市のスポーツを取り巻く現状と課題を踏まえ、基本理念である「市民の誰もがスポーツを楽しみ豊かな生活を送り続けられる 武蔵野市」の実現に向けて、特に計画期間において重点的に推し進めていく施策を6つ掲げます。

(1) 多様な主体が楽しむスポーツの推進

市民の誰もがスポーツを楽しむためには、一人ひとりの年代やライフスタイル等を踏まえ、その特性に応じた取組が重要です。本市では子育て世代・働き盛り世代のスポーツ実施率が課題となっていることから、その世代がより一層スポーツに親しめる機会を提供します。

(2) 新たなスポーツとの出会いの創出

より多くの市民がスポーツを楽しみ、継続的に取り組むことができるように、アーバンスポーツや、デジタルを活用したスポーツなどの新たなスポーツとの出会いを創出し、これまで以上のスポーツの楽しみ方を提供します。

(3) 障害者がスポーツに親しめる機会の創出

障害の種別や程度などにより、障害者のおかれている状況はさまざまです。障害者が自由に、かつ気軽にスポーツに親しみ、潤いのある市民生活を送ることができるよう、身近な場所で身体を動かす楽しさを体感できる機会の充実を図ります。

(4) スポーツ支援団体等との連携の推進

多様化する市民ニーズや持続可能なスポーツ環境に向けて、市内民間企業やスポーツ関連団体等との役割分担や連携の強化を図り、スポーツの場の提供、指導のノウハウや人的支援など、スポーツ環境の充実を図ります。

(5) スポーツ施設の整備

市民スポーツの拠点でもあり市立スポーツ施設の要でもある総合体育館について、今後も多くの市民に利用され、多様なスポーツ文化を創出できるよう、大規模な改修工事を行います。また、プールにおいても子どもや高齢者、障害者など、誰もが利用しやすいような整備を行います。

(6) 多様なスポーツの楽しみ方の創出

トップアスリートとの出会いは、スポーツの魅力や素晴らしさをより深く知る機会になるとともに、スポーツをはじめのきっかけや選手への憧れにもつながるため、トップアスリートとの交流の機会を提供します。

4. 具体的な施策

I 誰もがスポーツを楽しめる機会の創出

(1) 子どもが楽しむスポーツの推進

子どもの頃からスポーツに親しむことは、基本的な運動動作や体力を身につけるとともに、大人になってからもスポーツを楽しみたいと思う意識や自分自身に対する自信の醸成にもつながります。

スポーツによる子どもの育ちを大切に、学校教育と連携しながら、体力向上を目指した取組や、身体を動かす楽しさやスポーツの魅力を伝える機会、また、日頃の活動の成果を披露する場づくりの充実を図ります。

①基本的な運動動作と体力の向上のための取組

子どもが生涯にわたって心身ともに健康で豊かな生活を送ることができるように、市立小学校及び中学校における児童・生徒の体力を定期的に把握し、その結果を踏まえて、身体を動かすことが「楽しい」「好き」と思える取組を実施し、走る・跳ぶ・投げるといった基本的な動作の習得と体力の向上を図ります。

②スポーツの魅力や楽しさを体感できる機会の提供

子どもがスポーツの魅力や身体を動かすことの楽しさに触れ、大人になってもスポーツを続けたいと思う意識を育むために、本市にゆかりのある選手をはじめとするトップアスリートとの交流や、アーバンスポーツやニュースポーツ、レクリエーションの体験ができる機会を提供します。

③日頃の練習や活動の成果を披露する場づくり

子どもが自身の成長を実感して自信をつけるとともに、応援してくれる人への感謝の気持ちを培うことができるように、日頃の練習や活動の成果を発揮、披露するための大会やイベントの場づくりに取り組みます。

(2) 多様な主体が楽しむスポーツの推進

誰もがスポーツを楽しむ機会を提供するためには、市民一人ひとりの性別や年代、ライフスタイル等を踏まえ、その特性に応じた取組が重要です。

スポーツ実施率に課題のある子育て世代・働き盛り世代や、特有の健康課題のある高齢者、女性を対象としたスポーツに親しむ機会を提供します。また、誰一人として取り残さないという考えのもと、全ての市民がスポーツに親しむ機会の充実を図ります。

①子育て世代・働き盛り世代へのスポーツに親しむ機会の提供

子育て世代や働き盛り世代の人は、育児や仕事など、家庭や社会で担う役割や責任が大きく、日常生活の中でスポーツに親しむ優先度が低くなりがちです。親子で参加できる機会をはじめ、ターゲットに応じて内容・時間・託児の有無などを設定し、スポーツに親しむきっかけづくりを図ります。

②高齢者・女性へのスポーツに親しむ機会の提供

高齢者にとってスポーツは、心身の健康づくりをはじめ、いきがづくりや仲間づくりにも寄与する重要な活動です。また、女性の場合は、身体を動かさないことによる骨粗しょう症や糖尿病などのリスクが高い傾向にあります。

本市における高齢者及び女性のスポーツ実施率は低くはありませんが、今後もより質の高いスポーツライフを送ることができるように、身体を動かすことを楽しむきっかけづくりや継続的にスポーツに取り組める機会・場を提供します。

③多世代の市民へのスポーツに親しむ機会の提供

多世代の市民に対して幅広くスポーツを推進していくためには、初心者またはひとりであっても参加しやすい機会と、多世代がともにできるスポーツの場が重要です。スポーツを始めるきっかけづくりとして、また、一過性の実施に終わらないよう、継続的にスポーツに取り組むことができるように、スポーツに親しむ教室・講座・イベントなどを行います。

(3) 自然と親しむスポーツの推進

豊かな自然環境の中で身体を動かすことは、気持ち良く楽しむことに加え、開放感を抱くことによるストレスの緩和、自然への興味・関心の喚起などにもつながります。また、シーズンスポーツやアウトドアスポーツの市民ニーズがあることもわかっています。

このことを踏まえ、本市がこれまで力を入れて取り組んできた野外活動の充実とシーズンスポーツやアウトドアスポーツの推進を図ります。

①自然とふれあう野外活動の充実

本市がこれまで積み重ねてきた野外活動の取組を基盤に、キャンプやハイキングなどの機会を提供するとともに、野外活動に関する用具の貸し出し支援などを行います。

②シーズンスポーツやアウトドアスポーツの推進

シーズンスポーツやアウトドアスポーツは、若者に人気のある種目も一部ありますが、安全に配慮し、自分のレベルに適した内容を選択することにより、性別や年齢、体力に関わらず、複雑な技術やルールを習得しなくても実施できるものが多いです。

シュノーケリング、スキー、スノーボードなどのシーズンスポーツ、登山やハイキングなどのアウトドアスポーツを楽しむ機会を提供します。

(4) 新たなスポーツとの出会いの創出

東京 2020 大会の開催決定を契機として注目されたアーバンスポーツは、出場選手の活躍もあつてますます関心を集めており、若い世代を中心に普及しつつあります。また、ICTなどのデジタル技術革新の進展により、オンライン環境やデジタル技術を活用したスポーツの取組が充実しつつあります。

このような従来にはなかった新たなスポーツとの出会い、またそのスポーツに触れて、取り組む機会を創出します。

①アーバンスポーツなど新たな種目の紹介、普及・啓発

東京 2020 大会の影響で、スケートボードや自転車（BMX）などのアーバンスポーツはますます若い世代の関心が高くなっています。本市にあるストリートスポーツ広場をはじめとする施設を活用し、アーバンスポーツの普及・啓発とトップアスリートによる実演の機会や体験会を実施します。

②デジタルを活用したスポーツの推進

新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、動画配信サービスを利用したスポーツの取組が広まりつつあります。また、VR・ARを活用した新たなスポーツの楽しみ方も創出されています。これらの楽しみ方はウィズコロナの社会だけではなく、アフターコロナの社会であっても、誰もが気軽にスポーツに親しむことができる場づくりとして有効です。各種スポーツ教室やイベントなどの様々なスポーツコンテンツのオンライン配信や、デジタルを活用したスポーツの新しい楽しみ方を研究します。

Ⅱ 障害者スポーツの推進

(1) 障害者がスポーツに親しめる機会の創出

障害の有無に関わらず豊かな生活を送ることが最大限尊重され、地域で共に暮らしていく共生社会の実現が求められています。

スポーツの場においても、障害者がスポーツを楽しみ、続けることができるような機会を提供します。

①障害者が身体を動かす楽しさを体感できる機会の提供

「障害者」といっても一人ひとりの症状や障害の程度は様々であり、コミュニケーションの取り方や身体を動かすことのできる範囲が異なります。このような障害者の特性に柔軟に対応し、どのような種別や程度であっても、参加しやすい機会の充実を図ります。

②障害者がスポーツを継続して楽しめる機会の提供

障害者は様々な制約によりスポーツに取り組める機会が限られてしまう場合があります。継続的にスポーツを実施することが困難な傾向にあります。

安心して身体を動かし、継続的にスポーツを実施できるように、自宅や身近な場所において緩やかなレクリエーションやスポーツに親しめる機会を提供します。

(2) 障害者のスポーツを支える環境づくり

障害の有無に関わらず安心・安全な環境でスポーツに親しむことができるように、人的支援や施設整備の充実を図ります。また、参加意欲の喚起につながるように情報発信の充実も図ります。

①障害者のスポーツ活動を支える人材育成の取組

障害者のスポーツ活動を支援する場面では、健康や安全管理への配慮など、専門的な知識やスキルが求められる場合がある一方で、簡単なサポートがあればスポーツを楽しむことができる障害者もいます。障害者が安心してスポーツを実施できるように、専門的な知識やスキルや経験を持った人材の育成と、専門的な知識等はなくとも障害者が参加するスポーツイベントなどを支援する人材の育成を図ります。

②障害者がスポーツに取り組みやすい施設整備の充実

障害のある人が安心してスポーツを楽しめるよう、市立体育施設のバリアフリー化を図り、障害のある人もない人も一緒にスポーツを楽しむことができる環境を整えます。

③障害者の参加のしやすさに配慮した情報発信の充実

障害の種別や程度、さらに当事者自身の障害に対する感じ方によっても、障害者が参加したいと思うスポーツ教室やスポーツイベントは異なります。そのため、画一的な情報発信ではなく、どのような種別または程度の障害のある人にとって楽しむことができる機会なのかということを知りやすく示し、参加するハードルが低くなるような工夫を凝らした情報発信をします。

(3) 障害への理解を深めるスポーツの推進

共生社会の実現を目指すためには、障害のない人が障害への理解を深めるとともに、障害者が障害のない人と共に生活を送ることができるという自信や意識を醸成することが重要です。

スポーツを通して障害への理解を深めるため、誰もが障害者スポーツの魅力や楽しさを実感できる機会を提供するとともに、障害の有無に関わらずともに楽しむことができるスポーツの取組を充実します。

①障害者スポーツの魅力や楽しさを実感できる機会の提供

本市が協定を締結している一般社団法人日本ボッチャ協会との連携によるボッチャをはじめとする障害者スポーツの魅力や楽しさを実感できる機会の提供や、大会の誘致に努め、障害への理解を深めることにつなげます。

②インクルーシブスポーツの普及・啓発と機会の提供

障害の有無や年齢、性別等を問わず、誰もが楽しめるスポーツ活動を指すインクルーシブスポーツの考え方を市民に普及・啓発するとともに、障害のある人もない人も一緒にスポーツを楽しむことができる機会を提供します。

Ⅲ スポーツを支える担い手づくりと活動支援

(1) スポーツ指導者の発掘・育成

市民が自らの体力やスキルに応じてスポーツを楽しみ、能力を高めていくためには、適切なアドバイスや声かけ等の関わりができる指導者の存在が重要です。

現在活動しているスポーツ指導者に対して、スポーツの楽しさや魅力を伝える意識の醸成や指導スキルの向上を図る研修機会を提供します。また、スポーツ指導者になるためのきっかけづくりや指導機会の充実を図ります。さらに、学校の運動部活動の充実に向けて、民間スポーツ団体や企業とも連携しながら部活動指導員等の支援の担い手や体制づくりを図ります。

①スポーツ指導者の資質向上のための取組

スポーツの意義や楽しみ方を伝えつつ、実施者に対する人間的成長や人格に配慮できる指導者を養成するため、武蔵野市体育協会や武蔵野市スポーツ推進委員協議会と連携し、講習会や学び合いの場を提供します。

②スポーツ指導者の活躍の場を拡げる取組

本市のスポーツ指導者を増やし、活動の充実を図るため、スポーツを教える体験会などのきっかけづくりや、定着に向けた活動機会の提供、指導ニーズのある団体の紹介などを行います。

③持続可能な部活動の実施に向けた検討

本市の第三期武蔵野市学校教育計画*では、「持続可能な部活動の実施に向けた取組」において、子どもたちのニーズや部活動の持続可能性を担保するため、部活動指導員の配置の拡充や部活動の在り方の検討を行うこととなっていることから、学校教育と連携を図ります。

(2) スポーツボランティアの参加促進と活動支援

本市では、全国や東京都と比べて多くのスポーツボランティアが活動しており、その多くは、身近な地域スポーツの場で活動しています。一方で、地域スポーツの場では担い手が定着しづらいことや、スポーツボランティアへの参加のハードルが高いと感じている人が一定程度いることもわかっています。

そのため、スポーツボランティアとしての活動を体験する機会を提供するとともに、やりがいや達成感を得ながら活動を継続できるよう取り組みます。

①気軽に参加できるスポーツボランティアの機会の提供

本市で開催される大規模なスポーツイベントから日常的な地域スポーツの場面まで、市民のスポーツ活動を支える人材の育成を図るため、気軽に楽しくスポーツボランティアを経験できる機会を提供します。

②スポーツボランティアの活動継続と定着を図るための取組

本市は東京 2020 大会の開催を契機に、誰もがスポーツに親しむ環境づくりを目指してスポーツボランティア「HANDS」(登録制)を発足しました。スポーツボランティアの体験から継続への行動変容を促すとともに、地域でのスポーツに関する指導や大会運営、イベントの企画など、さまざまな活動の場へのマッチングを行い、スポーツボランティアとしての活動の定着を図ります。

(3) 多様な主体が支える環境づくり

多様な人がスポーツに親しむ環境を支えることで、様々な配慮や気配りのある機会や場になることが期待できます。女性や障害者、高齢者、子どもなどがスポーツの場を支えるきっかけづくりや機会の充実を図ります。

①女性や障害者等の活躍の場や指導者へのきっかけづくり

女性がスポーツをする際に抱えている女性特有の健康面の問題は、当事者であれば状況をより理解でき相談しやすい関係にあります。また、障害者がスポーツをはじめの際にも、障害当事者が手本となり指導することで、よりスポーツが身近になり、共感を得ることができます。誰もがスポーツを楽しむ環境を目指すにあたり、女性や障害者、高齢者等の活躍の場や指導者となるきっかけづくりを行います。

②子どもがスポーツボランティアを経験できる機会の提供

児童・生徒がスポーツに関連した様々な活動を通してスポーツの魅力を感じるとともに、地域活動の担い手として活躍できる力(知識・意識・関わり方)を身につけられるように、スポーツボランティアを経験できる機会を提供します。

(4) スポーツ支援団体等との連携の推進

本市は、これまで武蔵野市体育協会とその加盟団体、武蔵野市スポーツ推進委員協議会などのスポーツ支援団体等と連携し、スポーツ施策を推進してきました。今後もより一層の連携を図り、地域スポーツの推進を図ります。

また、本市のスポーツ環境をさらに充実するため、市内にある民間企業やスポーツ関連団体との連携を強化します。

①スポーツ支援団体との連携強化

各種スポーツ教室や大会の開催、地域住民同士の交流を目的としたニュースポーツやレクリエーションの機会を充実させることで、市民が身近な場所でスポーツを楽しむことができるように、武蔵野市体育協会とその加盟団体や、武蔵野市スポーツ推進委員協議会等との連携を強化します。

②スポーツ活動団体への支援の継続

市民が市内で継続的にスポーツに親しむためには、青少年関係団体や社会教育関係団体など、スポーツを実施することのできる受け皿となるスポーツ活動団体の存在が重要です。今後もスポーツ活動団体が活動を継続ができるように支援を継続します。

③スポーツ環境の充実に向けた民間企業等との連携強化

今後も持続可能なスポーツ環境を維持し、多様化する市民ニーズに柔軟に対応していくためには、行政のみの資源に限定せず、民間企業やスポーツ関連団体との連携が不可欠です。

市はスポーツに親しむきっかけづくりにつながるサービスを提供し、民間企業・スポーツ関連団体ではさらなる技術向上や専門性を高めるサービスの提供を行うなどの役割分担をしながら、スポーツを実施する場の提供や、指導のノウハウや人的支援など、本市のスポーツ環境の充実に向けて連携を強化します。

IV スポーツに親しむ環境づくり

(1) スポーツ施設等の有効活用

本市には総合体育館をはじめ、陸上競技場などのスポーツ施設やむさしの市民公園などの公園があります。また、学校体育施設の開放も行っています。このようなスポーツ施設等を有効に活用し、市民のスポーツの場を拡げます。

①既存のスポーツ施設や公園、学校体育施設等の場の活用

本市の総合体育館をはじめ、市内にある公園、学校体育施設のより一層の利用を促します。また、市内にある民間スポーツ施設の把握・活用も行い、スポーツ実施の場の充実を図ります。

(2) スポーツ施設の整備

計画期間中における施設整備は以下のとおりです。中間のまとめに対するパブリックコメント等をふまえて、第4章「体育施設類型別施設整備計画」を更新し、第二期武蔵野市スポーツ推進計画へ掲載します。

①武蔵野総合体育館の大規模改修工事

長寿命化を目的として令和6年度に大規模な改修工事を予定しています。給排水管や電気・機械設備などの更新のほか、市立スポーツ施設の拠点として誰にとっても利用しやすい施設となるよう、機能改善やレイアウト変更などを行います。総合体育館を訪れる一人ひとりがどのように過ごしたいかに焦点を置き、今後、工事に関する基本計画の作成、改修内容の検討、設計を行います。計画作成から設計の過程において、パブリックコメントの募集などを行います。

- | | |
|--------------------|---|
| ◆ 私が「スポーツをする」 | ・ 利用者の利便性、安全面の向上
・ バリアフリー化
・ わかりやすい案内
・ 子育て世代が楽しめる環境整備
・ アメニティの向上 |
| ◆ 私が「スポーツを観る、応援する」 | ・ 魅力ある大会の誘致、キャンプの誘致
・ 応援しやすい環境整備 |
| ◆ 私が「集う、学ぶ、遊ぶ」 | ・ 交流の結節点、ハブとしての役割
・ 野外活動センターの活用 |
| ◆ 私が「太陽と緑を感じ、憩う」 | ・ 開放感や緑との一体感の創出
・ 緑の育み、樹木の世代交代を促進 |
| ◆ 私が「いきいきと働く」 | ・ 事務スペース等の改善
・ バックヤードの確保 |
| ◆ 私が「持続可能なまちをつくる」 | ・ 30年後まで持続可能な施設・設備
・ 環境への配慮
・ 災害・感染症などへの備え |

②プールの今後のあり方

既存の温水プール、屋外プール、管理棟には課題が多く、武蔵野市第六期長期計画（令和2年3月）における「特に老朽化が進んでいるプールについては再整備のあり方について検討する」との記述に基づき、第二期武蔵野市スポーツ推進計画（仮称）の策定においてプール全体のあり方について検討しています。

<目的>

- 障害の有無に関わらず、幼児から高齢者までが快適かつ安全安心に、年間を通して利用できるプールであることがスポーツ施設としての役割であると考えています。
- あわせて、上記の単一の目的だけではなく、観るスポーツ・障害者スポーツの促進、エリア一体の良質なまちづくり、災害時への円滑な対応など、複合的な取組を検討します。

<現状と課題>

【温水プール・屋外プール・管理棟】

- 温水プール棟：平成元（1989）年9月竣工、管理棟：昭和 57（1982）年5月竣工。
- 管理棟が竣工 60 年となる令和 23（2041）年まで使用するには、改修工事費約 10 億円がかかる見込みです。
- しかし、管理棟は屋外プール用として建てられ、後に温水プールを増設しているため、当初想定していなかった通年利用や、温水プール棟と連結した使用に関しては課題が多く、改修しても、換気（臭気）、動線の複雑さ、バリアフリー化などの課題は解消できません。
- 屋外プールは、毎年7月から9月中旬の2カ月半に多くの市民に利用されていますが、規模が大きく水深も深く非効率的です。

【市立体育施設敷地内における通行等の状況】

- 障害者スポーツ、観るスポーツの推進のためには、障害者スポーツ大会等の際に選手が容易に来場し、安全・安心・円滑に移動できるスペースを確保することが望ましいとされています。しかし、トラックや大型バスの敷地内への進入が困難なことに加えて、駐車するスペースも十分ではなく、養生の敷設を要する場合もあることから、魅力ある大会・イベント等の招致に支障があります。
- 災害時には、総合体育館が物資輸送拠点、陸上競技場が自衛隊宿泊地となります。物資輸送の円滑化を図るためにも、進入路や駐車スペースの確保が重要です。

【周辺の状況】

- 西側の市道第 17 号線（中央通り）は景観整備優先路線として位置づけられています。将来的には、歩道の有効幅員の確保（幅員の拡張）、バリアフリー化、電線類の地中化により、快適な歩行空間を創出することを予定しているため、1～2mのセットバックが必要です。

【利用者数等】

- 年間利用者数は平成 30（2018）年度 156,176 人（7月：34,478 人、8月：32,104 人、9月 12,123 人）です。
- 使用料収入は約 2,300 万円／年です。
- ランニングコストは約 1 億円／年で、そのうち屋外プールにかかる経費は約 2,500 万円です。（ただし、指定管理者の人件費、工事費は含まれていない。）

○温水プールを全面貸切で行っている大会等は、市・体育協会・生涯学習振興事業団等の主催事業の年4回で、そのうち温水プールに加えて50m屋外プールを使用する大会は年2回です。

<3つの検討案>

プールの今後のあり方については、利用状況、現在及び将来にわたる財政的負担(イニシャル・ランニングコスト)と使用料収入(受益者負担)、メリットやデメリット、複合的な取組や得られる効果、他の体育施設の整備状況などを総合的に検討し、第二期武蔵野市スポーツ推進計画(仮称)において方向性を決定していきます。

	【案1】	【案2】	【案3】
検討案	温水プール・管理棟・屋外プール(50m)に保全工事を重ねながら今後20年間(管理棟築60年)程度、維持し使用する。	温水プール・管理棟・屋外プールを解体し、建て替える。建て替え後の屋外プールは25mに縮小する(既存の屋外プールは50m)。	温水プール・管理棟を解体し、建て替える。屋外プールは解体し廃止する。
比較コスト	*保全工事10億円 *屋外プールの管理・運営年2,500万円、20年間5億円 *計15億円	*解体・建替工事30億6,100万円 *屋外プールの管理・運営年2,500万円、20年間5億円 *計35億6,100万円	*解体・建替工事25億7,400万円
メリット	*屋外プール(50m)の継続利用。 *イニシャルコスト抑制。	*屋外プール(25m)の継続利用。 *温水プールの機能向上(※25mプールを7コースから9コースへ、幼児プールの屋内化など)。 *多目的スペースの確保。 *災害時等の敷地内への車両の進入路や駐車スペースの確保。 *市道第17号線歩道拡幅。	*温水プールの機能向上(※)。 *多目的スペースの確保 *スポーツ施設の集約を検討できる余地がある。 *災害時等の敷地内への車両の進入路や駐車スペースの確保。 *市道第17号線歩道拡幅。 *市道第17号線・第41号線交通円滑化。 *屋外プールのランニングコストの皆減。
デメリット	*換気、動線、バリアフリー等の課題が解決できない。 *市道第17号線の歩道が拡幅できない。 *敷地内への車両の進入路や駐車スペースが確保できない。 *屋外プールのランニングコストがかかる。	*長水路の大会ができない。 *イニシャルコストがかかる。 *屋外プールのランニングコストがかかる。	*夏期の利用人数の減・レクリエーション機会の減。 *長水路の大会ができない。 *イニシャルコストがかかる。

	案1	案2	案3
イニシャルコスト	○	×	△
ランニングコスト	×	×	○
利便性・機能性	×	○	○
快適性	×	○	○
多様性・バリアフリー	×	○	○
屋内プールの充実	×	○	○
屋外プール(夏期)	○	△	×
他プール等への活用	×	△	○
災害対応	×	○	○
まちづくり	×	△	○

3つの検討案を比較するにあたり、温水プールの機能向上を図るために必要な諸施設の面積を算出し、解体・建替工事にかかるイニシャルコストを試算しました。実際に設計を経て積算したものではないため、大まかな数値であることをご留意ください。また、案2・3の屋内プールの2コース増及び幼児プールの通年化、建替等による電気・水道等の使用量の減に関してランニングコストの増減が生じますが、上記の試算には含まれておりません。

③その他の施設

<武蔵野陸上競技場>

○5年に一度の陸上競技場第三種公認の検定に備えて維持、改修を行いながら、魅力的な大会・イベントが開かれるように整備をしていきます。

<武蔵野軟式野球場>

○予防保全的な維持管理を行いながら、計画的な改修を検討します。

<武蔵野庭球場、緑町スポーツ広場>

○予防保全的な維持管理を行いながら、計画的に人工芝の全面張替えを行います。

<ストリートスポーツ広場>

○周辺の体育施設の整備状況も勘案しながら、施設整備も含めた今後の利活用について検討します。

<中央公園スポーツ広場（都立中央公園内）>

○設置者である東京都の意向を踏まえながら利用環境の充実を検討します。

<旧桜堤小学校跡地の整備の検討>

○当面は桜野小学校の第2校庭として活用したのち、武蔵境圏におけるスポーツ広場として整備します。その時期については隣接する公共施設の整備状況を勘案したうえで検討します。

(3) スポーツ関連情報の提供方法の充実

スポーツへの関心の高まりがスポーツの実施へとつながるため、多様な媒体でスポーツ関連情報を発信することが重要です。紙媒体と電子媒体の特徴を踏まえて、市民にスポーツ関連情報を提供します。また、市民に情報を伝えるだけでなく、市民がその情報を活用してスポーツを楽しむやすくする取組の充実も図ります。

①多様な媒体による情報の発信・拡散

情報発信のデジタル化が進む一方で、紙媒体から情報を得ている方も多いことがわかっています。どちらか一方ではなく、これまで市民にとってより身近な広報紙による周知を維持しつつ、ホームページやSNS、動画配信など、多様な媒体によりスポーツ情報を届けます。

②スポーツ関連情報等の集約・活用

市民の主体的なスポーツ活動を支えるためには、スポーツができる場所、時間帯、機会、団体などを整理して情報を届け、手続き等の簡素化を図り、参加しやすくすることが重要です。

スポーツ施設、機会、団体等の関連情報の一元化を図り、さらにそれぞれの情報に対するアクセスのしやすさ、利用手続き等のしやすさを高めます。

V 武蔵野市の特性を生かしたスポーツ文化の醸成

(1) 応援・観戦するスポーツの推進

スポーツを観ることは、感動や興奮といった非日常的な感情を得ることにつながるとともに、チームや選手を応援する人たちとの一体感の獲得や仲間づくりも期待できます。

本市では、このことを踏まえ、「みる」スポーツの範囲を、プロスポーツやトップスポーツを観戦することだけではなく、地域のスポーツを観たり応援したりする活動を含めて捉えます。

市内で開催する大規模なスポーツ大会等の観戦環境を充実しつつ、地域のスポーツを応援する意識の醸成や観戦機会の提供を図ります。また、昨今、問題視されている応援モラルに関する適切なルールやマナーを育む取組を行います。

①地域のスポーツを応援する機会の提供

本市には、市内を拠点とするプロスポーツチームはないものの、近隣を含めて大学が5つあり、スポーツに力を入れている高校もあります。また、トップリーグに所属する団体や全国大会に出場経験のある団体・選手が地域で活動しており、質の高いスポーツの試合を応援・観戦できる環境が整っています。

このような本市の特徴を踏まえ、市にゆかりある選手やチームを応援する機会を提供するとともに、応援する仕組みづくりや地域の一体感の醸成に努めます。

②多様なスポーツ観戦環境の充実

ラグビーワールドカップ 2019™の開催や新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、大会会場やテレビによる従来の観戦の仕方に加えて、パブリックビューイングやオンライン配信のニーズが高まってきました。市内で開催する大規模なスポーツ大会や本市にゆかりのあるチームや選手が出場する大会の観戦を多様な方法で促します。

③応援モラルの定着を図るための取組

スポーツがもたらす効果としてフェアプレーの精神や相互理解、他者への尊重などが挙げられますが、コロナ禍に開催された東京 2020 大会をきっかけにSNSによる選手への誹謗中傷が深刻化し、社会問題となりました。

本市では、長い年月をかけて市民の自主的なコミュニティづくりや多様な市民文化が育まれてきました。今後も互いを尊重し認め合う社会を目指して、応援される側（プレーヤー）と応援する側（観戦者）とが互いにスポーツを楽しむことができるように、応援する際の適切なルールやマナーについて啓発を図ります。

(2) 多様なスポーツの楽しみ方の創出

本市には、生涯学習や文化活動を振興する事業団があり、このような団体との連携により、スポーツを様々な角度から楽しめる機会の創出が期待できます。また、本市にゆかりのあるトップアスリートとの交流はスポーツの魅力や素晴らしさをより深く知る経験を積むことにつながります。

本市の強みとなる団体や庁内との連携を図りつつ、スポーツとの融合により相乗効果が期待できる分野横断的な取組と、本市にゆかりのあるトップアスリートとの交流機会の充実を図ります。

スポーツは人と人とのつながりを創出し、交流を促進し、地域の一体感を醸成します。また、仲間がいることがスポーツを継続するための動機にもなります。スポーツを通じた仲間づくり、地域の活性化を図ります。

①芸術文化等の分野横断的なスポーツの楽しみ方の創出

市民の多様な興味・関心に対応しつつ、スポーツに親しむ人を増やすため、芸術文化、健康福祉、観光などの分野の庁内関係課及び団体と連携を図ります。音楽とスポーツの融合、映像とスポーツの融合など、分野横断的なスポーツの楽しみ方を創ります。

②トップアスリートとの交流機会の提供

トップアスリートとの交流は、選手への憧れやスポーツの魅力を感じるとともに、スポーツをはじめのきっかけにもなります。また、トップレベルのプレーに触れることによって、選手やスポーツ指導者としての技術の向上、夢を抱くきっかけにもつながります。トップアスリートによる学校訪問や講演、イベントなどを通して交流の機会を図ります。

③スポーツを通じたつながりの創出

個人で参加できるものに加えてチームで参加できるイベント・大会の開催や、スポーツ教室などのプログラムへの参加から継続へと促し、また、チーム・選手の応援や観戦の機会の提供など、様々な場面において、人と人との交流の接点を創出します。

(3) 大規模スポーツ大会のレガシーの活用

ラグビーワールドカップ 2019™や東京 2020 大会は、地域とのネットワーク、経験の蓄積、国際交流による異文化への理解など、本市に様々なレガシーを残しました。市民のスポーツ推進を図るため、これらのレガシーを有効に活用した取組を行います。

①東京 2020 大会等のレガシーの活用

ラグビーワールドカップ 2019™や東京 2020 大会の開催を通じて、キャンプ地誘致、まちなかでのイベント開催、パブリックビューイングの実施、障害者スポーツの大会の開催や誘致など、多くの市民の力を得ながら数々の事業を重ねてきました。これらのレガシーを活用してより一層のスポーツの推進を図ります。

②スポーツを通じた国際交流

スポーツは国境や言語を超えて交流ができるツールのひとつです。今後も、東京 2020 大会等において育んできた海外とのつながりを大切にしながらスポーツを通じた国際交流を続けるとともに、音楽や食などの他分野による交流の充実にも努めます。これらを通して国際理解、多様性の尊重、共生社会の実現を目指します。

第4章 体育施設類型別施設整備計画

今後、中間のまとめに対するパブリックコメントにおいて寄せられたご意見等を踏まえて、第4章「体育施設類型別施設整備計画」を更新します。

参考資料

1. 用語説明

頭文字	用語	説明
英字	A I	「Artificial Intelligence（人工知能）」の略で、推論・判断等の知的な機能を備えたコンピュータシステムです。データベースを自動的に構築したり誤った知識を訂正したりする学習機能を持つものもあります。膨大な量のデータ分析や業務効率化等に活用する事例が増えてきています。
	A R	「Augmented Reality（拡張現実）」の略で、現実世界にデジタル合成などによって作られたバーチャルの視覚情報を重ねて表示し、人間の現実認識を拡張する技術、またはコンピューターによって拡張された現実環境を指します。
	I C T	「Information and Communication Technology（情報通信技術）」の略で、情報・通信に関する技術の総称です。具体的には、インターネット、携帯電話・スマートフォン、A I（人工知能）、ビッグデータ、I o T（モノのインターネット）、クラウド等の技術があり、それらを活用したコンピュータ・ロボット・通信等の機器やソフトウェア、S N S等のサービスも含める場合があります。
	Sports for All イベント	誰もがスポーツに参加できる環境づくりを目指し、オリンピック・パラリンピック等国際大会の気運醸成を図るためのイベントです。
	S N S	「Social Networking Service（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）」の略で、インターネット上の会員制サービスの一種。友人・知人間のコミュニケーションを円滑にする手段や、新たな人間関係を構築するための場を提供します。個人に限らず企業や自治体の情報発信の手段としても広まっています。
	V R	「Virtual Reality（仮想現実）」の略で、ヘッドマウントディスプレイ内に 360 度のコンテンツを表示し、その映像内にいるかのような臨場感を与える技術を指します。
あ行	アーバンスポーツ	広い場所を必要としない、個人が気軽に始められるなどの理由により、都市住民が参加しやすい都市型スポーツのことで、スケートボード・スポーツクライミング・パルクール・インラインスケートなどを指します。
	アウトリーチ	支援が必要であるにもかかわらず届いていない人に対し、行政や支援機関などが積極的に働きかけて情報・支援を届けるプロセスのことです。
	アクアスロン	水泳とランニングを続けて行う競技です。トライアスロンは水泳、自転車、ランニングを続けて行う競技ですが、そのうち自転車を除いたものがアクアスロンです。
	いきいきサロン	おおむね 65 歳以上の高齢者を対象に、週 1 回以上、5 人以上で、介護予防や認知症予防のプログラム（2 時間程度）を行う「通いの場」です。地域住民団体・NPO 法人・民間事業者等が運営しており、市はその団体等へ補助や支援を行います。高齢者の社会的孤立感の解消、心身の健康維持、要介護状態の予防、住み慣れた地域での在宅生活の継続支援を図ることを目的としています。平成 28 年 7 月から事業を開始しています。
	インクルーシブスポーツ	年齢、性別、障害の有無等に関わらず、誰もがお互いの個性や人格を尊重するとともに、人々の多様性を認め合い、さまざまな人が共に実施できるスポーツを指します。
	親子稲作体験	武蔵野市と新潟県長岡市小国町が友好都市交流を行っています。交流の一環として、武蔵野市の親子が長岡市小国町を訪れ、お米作りを体験する事業のことです。年 2 回（春・秋）実施しています。

頭文字	用語	説明
	オンライン配信	インターネットより動画を配信することです。
か行	共生社会	これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会です。それは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様なあり方を相互に認め合える全員参加型の社会です。
	健康寿命	WHO（世界保健機構）が提唱した指標で、平均寿命から寝たきりや認知症など介護状態の期間を差し引いた期間のことです。
	健康づくり推進員	本市には、市民の健康づくりをサポートする健康づくり支援センターがあります。市民公募による健康づくり推進員は、「自分の健康は自分で守ろう！」を実践する市民を増やすため、市民とセンターをつなぐ架け橋として、健康づくり情報の発信、地域ニーズの集約、健康づくり講座の企画運営等を地域とのつながりの中で行っています。
	健康づくり人材バンク	健康づくりの正しい知識を伝え、効果的な啓発を推進するために、主に健康づくり支援センターの各種講座の講師を、栄養・運動・保健・歯科の豊富な各分野の専門家が担うことができるように設けられた登録制度です。保健師、管理栄養士、歯科衛生士、健康運動指導士等の専門的知識を有する人材を登録しています。
	健康づくりパートナー	「みんなに届け！健康づくり情報！」を目指す健康づくり支援センターのしくみの一つで、個人を対象とした市民の登録制度「健康づくりはつらつメンバー」と、事業者・団体を対象とした「健康づくり応援パートナー」があります。「健康づくりはつらつメンバー」は、自ら健康づくりを実践するとともに家族や周りの方々に情報などをお伝えすることにより、また「健康づくり応援パートナー」は、チラシ・ポスター設置配布、健康講座のコラボなどにより、健康づくりのパートナーとして共に地域に健康づくりの輪を広げています。
	後期高齢者	満 75 歳以上の高齢者のことです。
さ行	市民スポーツデー	毎月第 3 日曜日（7、8、3 月除く）に、市内小学校の校庭・体育館を市民に開放している取組です。
	市民スポーツフェスティバル	毎年体育の日に開催する、市民を対象とした、誰でも楽しめるスポーツイベントです。約 20 種類のさまざまなゲームと体力テストの体験を通じて、身体を動かす楽しさを実感してもらい、スポーツへの興味・関心を高めます。
	スポーツ・インテグリティ	インテグリティとは高潔さ・誠実さ・品位などを意味しています。そのため、スポーツ・インテグリティは、スポーツが不正・ガバナンスの欠如・暴力・ハラスメント・ドーピング・差別などの様々な脅威により欠けることなく、価値ある高潔な状態を意味します。
	スポーツ基本計画	日本のスポーツに関する施策を総合的かつ計画的に推進するため、スポーツ庁が策定する計画のことです。スポーツ基本法の理念を具体化し、国、地方公共団体及びスポーツ団体等の関係者が一体となって施策を推進していくための重要な指針として位置付けられています。平成 24 年に第一期、平成 29 年に第二期が策定されており、令和 4 年に第三期が策定される予定です。
	スポーツ基本法	日本のスポーツに関する基本理念を定め、国、地方公共団体の責務、スポーツ団体の努力等を明らかにするとともに、スポーツに関する施策の基本となる事項を定めた法律です。平成 23 年 6 月 24 日に、平成 23 年法律第 78 号として公布され、同年 8 月 24 日に施行されました。
	スポーツボランティア「HANDS」	東京 2020 大会の開催を契機に、誰もがスポーツに親しむ環境づくりを目指して、障害者スポーツを含めたスポーツを支える「スポーツボランティア」の組織のことです。平成 30 年に設立しました。

頭文字	用語	説明
	性自認	自身の性別に関する認識であり、必ずしも生物学上の性と一致するとは限りません。自認する性は「男性」「女性」のみではなく、多様です。また、ときに変容することもあります。
	性的指向	恋愛感情又は性的な関心がどのような性に向かう／向かわないかについての指向のあり方を指します。
た行	タグラグビー	ラグビーを起源とし平成4年にオーストラリアで生まれたスポーツで、ラグビーボールを使いタックルを無くした代わりに腰につけた2本のタグ（リボン）を取り合う、接触プレーの少ない競技です。
	第三期武蔵野市学校教育計画	本市における学校教育の現状と課題を整理するとともに、目指す方向性を明らかにするために教育委員会が策定した計画で、計画期間は令和2年度から令和6年度までの5年間となっています。
は行	パブリックビューイング	公園・広場や体育館、競技場などに大型スクリーンを設置し、大勢で別の会場で行われているスポーツの試合などを見ることです。
	ファミリースポーツフェア	子どもから高齢者まで誰もが楽しめるニュースポーツのイベントです。武蔵野総合体育館と陸上競技場を会場とし、メインアリーナ、サブアリーナ、ダンス室、陸上競技場に加え、卓球室や温水プールを無料で開放しています。
	ホストタウン	日本の自治体と、令和3年に延期となった東京2020大会に参加する国・地域の住民等がスポーツ、文化、経済などの多様な分野で交流することを通じて、地域の活性化等に活かし、東京大会を超えた末永い交流を実現することを目的とした取組です。
	ホストタウンサポーター	東京2020大会の開催を契機に、本市はルーマニアのホストタウンに登録されました。ルーマニア選手団の応援や、市民におけるルーマニアの理解を深める取組のボランティア活動を担う人材のことです。
ま行	むさしのジャンボリー	市内在住の小学校4～6年生を対象に、青少年問題協議会（青少協）地区委員会と市が共催して長野県川上村の市立自然の村で実施する2泊3日の野外体験事業です。自然の中で様々な体験をすることにより、自立心、創造性、豊かな心を育むことを目的としています。
	むさしのジュニア特派員	東京2020大会等に向けた武蔵野市実行委員会の、ボランティア・市民活動・広報分科会の取組です。市内の小・中・高校生が参加し、第一期は平成30年7月から、第二期は令和元年7月から活動しました。
や行	野外活動サポートスタッフ	野外活動センターの主催事業（キャンプ、自然観察など）の業務補助を担う人のことです。宿泊事業における生活指導やプログラム作り、キャンプ事業でのマキ割り、火おこし指導やレクリエーション指導、事業実施中の安全管理などの業務に従事します。
	「夢・未来」プロジェクト	オリンピック・パラリンピック教育のより一層の充実を図るために、幼児・児童・生徒がアスリート等との直接交流を通じてスポーツのすばらしさを実感し、夢や希望を持ち続けることができるよう、オリンピックやパラリンピアン等を学校に派遣する東京都の事業です。
ら行	レガシー	レガシー（legacy）とは本来、過去に築かれた、精神的・物理的遺産の意であるが、第二期武蔵野市スポーツ推進計画（仮称）においては、オリンピック・パラリンピック競技大会等の開催により開催都市や開催国が、長期にわたり継承・享受できる、大会の社会的・経済的・文化的恩恵のことを指しています。

2. 武蔵野市のスポーツ・運動に関するアンケート調査の概要

(1) 調査目的

本調査は、市民のスポーツや運動に関する現状や、これからのスポーツの推進に対する意見やニーズを把握し、「第二期武蔵野市スポーツ推進計画」の基礎資料とすることを目的として実施しました。

(2) 調査対象・抽出条件

調査の略称	調査対象	抽出条件
①児童・生徒向け調査	市立の小中学校に通う小学5年生と中学2年生	令和2年12月1日時点で市立の小中学校に在籍している小学5年生と中学2年生それぞれ全数
②成人等向け調査	市内在住の16歳以上の市民	令和2年11月1日時点の住民基本台帳より2,000人を無作為抽出
③関係団体向け調査	市内で活動するスポーツ関係団体等	スポーツ推進委員協議会や体育協会加盟団体、障害者団体等、1団体あたり3名に配付
④施設利用者向け調査	市立スポーツ施設の利用者	武蔵野総合体育館または武蔵野温水プールの利用者

(3) 調査方法

調査の略称	調査方法
①児童・生徒向け調査	学校を通じて配付・回収
②成人等向け調査	ダイレクトメールにより配付・回収
③関係団体向け調査	郵送により配付・回収
④施設利用者向け調査	武蔵野総合体育館または武蔵野温水プールを訪れた人に対して直接配付・回収

(4) 調査期間

調査の略称	調査期間
①児童・生徒向け調査	令和2年11月30日(月)～12月14日(月)
②成人等向け調査	令和2年12月10日(木)～12月25日(金)
③関係団体向け調査	令和2年12月4日(金)～12月18日(金)
④施設利用者向け調査	令和2年12月5日(土)～12月25日(金)

(5) 回収結果

調査の略称	回収結果		
	配付数(件)	回収数(件)	有効回収率(%)
①児童・生徒向け調査	1,575	1,505	95.6
小学5年生	969	942	97.2
中学2年生	606	563	92.9
②成人等向け調査	2,000	690	34.5
③関係団体向け調査	123	90	73.2
④施設利用者向け調査	200	177	88.5

(6) 調査内容

調査の略称	調査内容
①児童・生徒向け調査	1 調査対象の基本属性について 2 スポーツとの関わりについて
②成人等向け調査	1 調査対象の基本属性について 2 スポーツの実施状況について 3 スポーツの観戦状況について 4 スポーツを支える活動について 5 障害者スポーツについて 6 武蔵野市のスポーツを取り巻く環境について 7 市のスポーツ施策について
③関係団体向け調査	1 調査対象の基本属性について 2 スポーツの実施状況について 3 スポーツの観戦状況について 4 スポーツを支える活動について 5 障害者スポーツについて 6 武蔵野市のスポーツを取り巻く環境について 7 市のスポーツ施策について
④施設利用者向け調査	1 調査対象の基本属性について 2 施設の利用状況について

(7) ヒアリング調査の実施概要

市内のスポーツ関連団体が抱える課題や市立スポーツ施設及びその設備への要望などを整理するため、前述した「関係団体向け調査」と「施設利用者向け調査」の回答者のうち、協力の意向を示した一部の人に対して、令和3年2月～3月にヒアリング調査を実施しました。

3. 第二期武蔵野市スポーツ推進計画策定の経過

開催日	議題・内容
<p>第1回 令和3年4月27日</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 策定委員会の運営について ・ 策定方針と策定スケジュールについて ・ 武蔵野市のスポーツ・運動に関するアンケート調査結果
<p>第2回 令和3年5月26日</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 策定委員会会議の傍聴について ・ 本計画におけるスポーツの定義 ・ 武蔵野市のスポーツを取り巻く現状と課題 (するスポーツ・みるスポーツ)
<p>第3回 令和3年6月30日</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 武蔵野市におけるスポーツの価値と定義 ・ 本計画における基本理念 ・ 武蔵野市のスポーツを取り巻く現状と課題 (ささえるスポーツ、障害者スポーツ) <p>※会議前に総合体育館と温水プールの見学を実施しました。</p>
<p>第4回 令和3年8月25日</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 武蔵野市のスポーツを取り巻く現状と課題 (ICTを活用したスポーツ、体育施設の今後のあり方) ・ 武蔵野総合体育館、温水プール・屋外プールのあり方 ・ 計画書の構成案及び施策体系案 ・ 施策の体系について
<p>第5回 令和3年9月21日</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中間のまとめ骨子案について ・ 総合体育館大規模改修工事に関するコンセプト等
<p>第6回 令和3年10月6日</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中間のまとめ(案) ・ プールの今後のあり方について

4. 第二期武蔵野市スポーツ振興計画（仮称）策定委員会委員名簿

氏名	所属・肩書
◎松尾 哲矢	立教大学 コミュニティ福祉学部 教授
○石黒 えみ	亜細亜大学 経営学部 准教授
秋本 清	武蔵野市体育協会 会長
櫻井 昭	武蔵野市スポーツ推進委員協議会 会長
鈴木 健太郎	武蔵野市立関前南小学校 校長
河合 雅彦	武蔵野市立第三中学校 校長
藤田 勝敏	公益社団法人東京都障害者スポーツ協会 スポーツ振興部 部長
鎚 邦宏	一般社団法人横河武蔵野スポーツクラブ 常務理事 事務局長
多田 てい子	（公財）武蔵野健康づくり事業団 武蔵野市健康づくり推進委員
前川 洋司	野村不動産ライフ&スポーツ株式会社 法人営業部 副部長
新野 雅史	公募市民
古賀 祐輝	公募市民
田中 博徳	公益財団法人武蔵野生涯学習振興事業団 事務局長
樋爪 泰平	武蔵野市教育委員会 教育部長

◎委員長、○副委員長

第二期武蔵野市スポーツ振興計画（仮称）策定委員会

事務局

武蔵野市教育委員会生涯学習スポーツ課